母さんのいとし子

ラオスの短編小説集

ウティン・ブンニャウォン著

前田初江訳

母さんのいとし子

ラオスの短編小説集

ウティン・ブンニャウォン著
前田初江訳

母さんのいとし子

ラオスの短編小説集

ウティン・ブンニャウォン著

前田初江訳

目次

一　つがいのオオハシ……3
二　灰モック……12
三　一翼を担う……25
四　母さんのいとし子……33
五　家の前のチャンパー……42
六　父さんの友だち……51
七　五〇キープ……58

八　ディックとデーン …… 65
九　母が留守だった時 …… 81
一〇　骨折り損 …… 89
一一　ジャール平原からの声 …… 102
一二　美しい人 …… 111
あとがき …… 123
著者略歴 …… 124

つがいのオオハシ

ラオス暦三月（訳注—西暦二月）初旬、田んぼの縁に立つチャーンの花が、夕暮れの日差しに映えて目を刺すほど鮮やかな紅色になって輝くように咲いていた。

そこから遠くない所に、群を抜いて立つ一本の砂糖椰子の木があった。どんなに風が吹こうと雨が降ろうと日が照りつけようと、びくともしないように見えた。この木はずっと前から大地に根ざしていた。この辺りの村人は、この木で時がわかると重宝がっていた。太陽が椰子の真上高く昇ると、正午ということで、椰子の天辺と同じ位置まで下りてくると、牛や水牛を小屋に入れ、主婦たちは夕餉の支度をする時間ということになっていた。

あちこちの家から立ち上る白い煙は、薪から出る煙とモチ米を蒸す湯

煙だった。夕方の陽光は梢を突き抜け、その湯煙と混じり合って縞模様を作った。そして、それは方々へ広がり大気の中へ漂っていった。

ウンは米を蒸す鍋をかまどに掛けてから、七歳になる息子のニットと一緒にベランダに出て座った。家の前の敷地は広々としていた。その敷地に接して以前は牛車が往来するだけの土の道があった。去年の半ば頃から木材を運ぶトラックの往来が、いつも見かけられるようになっていた。夕方の道は、一日の野良仕事を終えて三々五々家路に向かう人が通るので活気づいてきた。最初は牛や水牛が姿を現し、その後から家畜を駆り立てる人が歩いて来た。水牛につけた木製の鈴の音が、犬の吠える声と混じり合って聞こえてきた。それが農村の一日が終わろうとしている合図になっていた。

ウンは道に目をやって、往来する人たちのいろいろな移動の様子を眺めた。時々、こういう人の中から、いつもの仕事を終えて家に向かって

来る彼女の夫ティッタンが姿を現すのだった。彼女は夫を待っていた訳ではないけれど、たまたまベランダに座っている時、夫の帰宅とかち合ったのだった。

ほとんど毎日のように夕方になると、ウンは子どもと一緒にベランダに座って、田んぼの北側の空を飛んでいく鳥を見たり、太陽が西の山並みに沈む前の自然を眺めたりした。

鳥たちは三つか四つの群になって東の方から来て、村の西側の緑生い茂る森にある巣を目指して飛んで行った。低く飛ぶ群れも高く飛ぶ群れも、乱れることなく一定の間隔を保ちながら前の方へ移動する点のように見えた。こうして巣へ帰る多くの鳥の中に、二本の線を描くように真直ぐ並んで飛ぶ一対のオオハシがいた。そのオオハシは毎日決まって砂糖椰子の真上を飛んでいた。翼を広げて優雅に夕方の空を渡って行った。

彼女はこの二羽の鳥がいつ頃からつがいになって砂糖椰子の真上を

飛んでいるのか知らなかった。けれどオークパンサー（訳注—仏教行事の雨期篭り明け・十月）が過ぎた頃から毎日見かけていた。彼女はこのつがいを息子にも見るよう指差して、その行方を追いながら一緒にじっと見続けた。彼女の思いも遥か彼方へ移ろっていくようだった。彼女は鳥になって果てしなく広がる大空へ飛んで行きたいと思った。時々そのつがいは、遠くへ飛んで行って見えなくなってしまったかと思うと再び姿を見せた。でも、その時には既に小さな小さな点にしか見えなかった。

「あそこだ！　母さん。あそこの二本の高い木の真上だよ」

彼女より目の良い息子が母に見るよう指差した。

「どこ、どこよ？　あっ、見えた。ちいさい点になってる！　あらっ、もう見えなくなっちゃった」

「まだ見えるよ、母さん。針の先っぽぐらいちいさいよ。ずっと向こうへ飛んで行く。まだすごーくちーさく見える。あれっ、何も見えなくな

24/VH

っちゃった。母さん、もう何にも見えないよ」
「直に父さんが帰って来るわ」
彼女は子どもにこう言ったものだった。
ウンは晴れ晴れとした気分で息子と一緒に鳥を眺めながら、時折、かまどに薪を押し込みに台所に立った。
家の前には階段が取り付けてあった。その階段の下近くに、ビールやペプシの空き缶が二、三個転がっている小さな砂山があった。こういう派手な色の空き缶は、田舎にしては目新しく珍しいものであるため目を引いた。彼女の息子ニットは、その缶がきれいなので集めて遊んでいたが、どんな味がするのか母も子も飲んだことはなかった。こういう空き缶は去年の末頃から見かけられるようになった。それらは道沿いに散らばって、タバコのベンソンやサムハーの空き箱などと一緒に敷地に入って来た。これらは木材運搬トラックや真新しいピックアップ・トラック

に乗った人たちが来ると同時に持ち込まれた。

最初、村人は彼らのことを「材木屋」と呼んでいたが、彼らはこの言葉を好まなかったので、村人に「実業家」と呼ばせるようにした。ところが、その言葉は村人にとって新しい語彙だった。それで彼らは意味がよく理解できなくて、「材木屋の実業家」とつなげて呼ぶことにした。時々、こういう実業家たちは長い銃を背負っていた。彼らは村人に出会うと狩りに使うためだと言った。

たくさんの鳥たちは、大空を飛び田んぼを渡って、ほとんど帰ってしまい、数えるほどしか残っていなかった。今日、彼女と息子は、いつものように砂糖椰子を越えて飛ぶ、いつものつがいのオオハシを見ずに終わった。彼女は昨日もあのつがいが砂糖椰子の上を飛んで行くのを見ていたから、飛ぶ道筋を急に変えたとは思えなかった。もしかして、誰かがあの鳥の巣を壊して卵を持ち去ってしまったので、居場所を移して巣

へ帰る道筋を変えることになったのだろうか。こう思いついて彼女は目を閉じ、絶対にそうなってほしくないと思った。そして、あの鳥は前よりも遠くへ食べ物を探しに行って、巣へ戻るのが遅くなったのだと思うことにした。彼女はこれからもあの鳥を見たかったので、そのうち飛んで戻って来てほしいと願った。

そして、自然に湧いて来たイメージは、遠くにある食べ物を探す場所から飛び出した鳥は、いつまでも慈しみ合う元からの好一対になって、優雅に彼方の空からひたすら前方を見据えて近づいて来て、この田園地帯まで飛んで来たというものだった。直にいつものようにあの椰子の木を越えて飛んで来るだろう…。

彼女はもう一度、砂糖椰子の上を見たけれど、あのつがいの鳥が飛ぶ姿は見えなかった。

彼女の夫ティッタンが帰宅した。その少し前、一台のピックアップ・

トラックが後方にホコリを撒き上げて家の前を通り過ぎた。ティッタンは、材木屋たちが銃で射止めたすごく大きな二羽の鳥をピックアップ・トラックの後ろに吊るして行ったのを見たと言った。

ウンは言葉を失った。彼女は体のどこか一部が壊れて欠けていくような感覚を味わった。不意に一瞬、寒気が心を襲った。彼女はその鳥が決して椰子の上を飛ぶ二羽でないことを祈った。

乾期の風がそっと吹いてきた。太陽は山の尾根に沈んでしまい、夕闇が薄い影を落とし始めた。彼女はなおも家の前に捨てられたビールやペプシの空き缶をつらつら眺めていた。それらは彼女が買って飲むことはできないものだけれど、もっともっと増えていくだろう。それと同時に鳥の数は一羽、二羽とこの地の空や田んぼから減っていくだろう。

何日も経った時、ウンは木材を運搬するトラックが増えていることに気がついた。車はたくさんの鳥がねぐらにしている西の方の、まだ豊か

な緑のある森を目がけて走って行った。
　この人里離れた村を通るたった一本の道は、いまだかってあり得なかったホコリで何もかも隠れてしまった。ホコリは舞い上がり道沿いの木の葉を覆い辺りを霞ませた。そして、この時期、木の上の方に美しく咲いているチャーンの花を、一つ残らずホコリまみれにしてしまった。
　あの日以来、ウンと息子は、あのオオハシのつがいが砂糖椰子の上を飛ぶ姿を、二度と見ることはなかった。

一九九〇年　ワンナシン掲載

灰モック

　ピウが水浴びを終わった時には、太陽はまだ山の向こう側に隠れていなかった。淡い黄色の日差しは、岸辺の木々の先を通り抜け、緩やかに流れる川面にキラキラと光る影を映していた。
　彼女は濡れた布をよく絞って腕にかけた。土手を上がろうと足を踏み出した途端、視線が光るものを捉えた。手を伸ばして拾い上げてみると、それはずっしり重い高価な銀のベルトだった！
　彼女は辺りを見回した。歩いてもさほど遠くない下流の方に二、三人が水を浴びていた。彼女は自分に関心を向ける者はいないと見て、その銀色のものを濡れた布の下に押し込んで隠すと、普段と違ってドキドキしながら土手を上がって家に向かって歩き出した。彼女は、持ち主を探して返すか、自分の財産にするか、そこまで考えていなかった。とにか

く誰かに見られないように急いで水浴び場から抜け出すことだけを考えていた。
ところが、彼女が土手に駆け上がった時、ちょうどオロオロした顔をして小走りでやって来たオーイと出会した。
「わたしの銀のベルト見なかった？」
オーイが尋ねた。
「なにも見なかったけど…」
ピウは強いてさりげない声で反射的に答えた。
オーイは、置き忘れた自分の持ち物を急いで探そうと、それ以上何も聞かないで水浴び場へ素早く駆け下りて行った。
家へ戻ると、ピウは震える手でベルトを持って見つめた。彼女は物を盗んだり、他人が落とした高価な物を取ったりしたことはなかった。彼女はそれを腰につけて鏡の前で右や左を向いて見た。そうして自分の顔

を眺めると嬉しそうではなかった。不安でたまらなく疑われているとばかり思い込み、様々な問いかけが浮かんできた。

「わたしが取ったって、わかるかしら？」

彼女は思った。

「あの川岸で水を浴びる人は大勢いるもの、ほとんどの村の人って言えるから、わかりっこないわ」

彼女は一人で答えた。

「父さんと母さんに話した方がいいかなあ？」

「話せばきっと返しに行かせられる。でも、見なかったってオーイに言ってしまったから、言ったことを変えるなんて、どうかしら？」

ピウは自分に質問を繰り返しても答えは見つけられなかった。返したい気持がある一方、ほしい気持もあった。彼女はかなり生活が苦しい農家の娘で、両親は彼女に銀のベルトを買い与える余裕はなかった。しま

って置くとしたら相当長い間待たなければ取り出して使うことはできなかった。彼女の住む村は、みな顔見知りで、誰かが他人の物を持って行って使えば、すぐに知れてしまう小さな片田舎だったからだ。彼女は、この村の誰もがこの事を忘れてしまうのを今後もずっと待たなければならないだろう。その時がきたら彼女は両親に、どこでベルトを手に入れたのかを、どんな風に話すのだろう。事は益々大きくなっていき、彼女は両親にどうやって、もっともらしいウソをつくのだろう。

彼女は、同じ村の川上に住むオーイの顔を思い浮かべた。オーイはようやく娘らしくなったので、一年余り前から銀のベルトをし始めたところだった。その前は普通のベルトをしていた。大切に扱えないかもしれないと両親が銀のベルトをすることを許さなかったのだ。オーイは十歳の時に母親を亡くしていた。母親が死んで四年経った時に、父親は新しい妻を娶った。そして一緒に暮らすようになって二年ほど過ぎていた。

ピウは、オーイの母親ソーイおばさんが、出産の時に出血多量で亡くなり、六人もいた子どもは、母なし子になった時のことをよく覚えている。それは同じ村の友だちの深く悲しいできごとだった。

思い悩んだ末、ピウはベルトを返しに行こうと思った。けれど、ある考えが湧いてそれを押し止めた。彼女は誰も見なかったことをひたすら願った。

しまっておいても構わないんじゃないかなあ。もしかして、後でまた問題になったら、町にある銀製品の商店へ売りに行くかもしれないし。この考えは自分に都合の良いものだったけれど、彼女の良心がこう告げた。

「人の物を取るのは良くないことだ。罪になる！」

彼女は注意深くベルトをしまうと部屋から出てきた。オーイが家に訪ねて来ることばかり考えてキョロキョロした。

24/VII

その日の夕方、村長の呼びかけで二〇人以上の村人が村長宅へ集った。呼び出されて行ったのは、夕日が沈むほんの少し前、あの川岸へ水浴びに下りた者たちだった。川岸近くに家があるポンおじさんの家族が証人になって、その頃、誰が水を浴びていたかを報告した。その中にはピウも含まれていた。更に、この村の年寄りが四、五人集まった。

村長と年寄りたちは、ベルトを取った者は持ち主に返すよう説得し懇願した。話し合いは、最初は小声だったが次第に騒がしくなった。結局のところ、取ったという者は誰もいなかった。

村長は別の方法を考えた。そして、次の日の夕方までに灰モック（訳注ーモックとは魚肉や香菜をバナナの葉で包んで蒸したり焼いたりする料理で、灰モックは魚肉の代わりに灰をバナナの葉で包んだもの）を作って自ら村長の家に届けるよう全員に言い渡した。この方法は過ちをした者に、よく考える時間を与えるという狙いがあった。

ピウはできるだけ自然に振舞うようにして家に向かって歩いたものの、そうすればするほど不自然になるのを感じた。彼女は、足を運ぶ度に彼女につきまとう大勢の人の視線を感じた。咳をしても自然に出たようではなく、笑っても喉が乾き切っているように感じた。何を話しても言い誤りを指摘されるように思えた。ピウは思案に暮れ気分は重かった。ベルトを探しに人が家を尋ねて来ることばかり考えて恐かった。

次の日、彼女が家の床に座ってベルトのことを思い悩んで、どうしたらいいか決心しかねていた時、ちょうど家の木戸でオーイの声がした。

「誰かいる？」

オーイは家の中の人に向かって声をかけた。ピウはうろたえ、顔は青ざめ胸は早鐘を打った。彼女は屋敷に入って来るオーイを家の竹壁の隙間から覗き見た。程なく家の裏で、布を黒く染めていたピウの母親がこう答えた。

「ここにいるよ」
「誰もいないかと思ったわ、しーんとしてるんだもの。おばさん、プー（訳注―キンマ。葉はコショウに似ていて、ビンロウ樹、石灰と一緒に噛み、いわゆる噛みタバコに用いる）を取るのにハシゴを借りに来たわ。母さんがね、親戚へ行くからプーを手土産にするんだって」
　こう言いながらオーイは家の裏手へ真直ぐ歩いて行った。
「そう、持って行きな。ハシゴ、そこの米倉の横にあるから。オーイ、どうなった？　あんたのベルト、まだ見つからないのかね」
「まだ見つからないのよ、おばさん。なくなっちゃったんだろうか。母さん、物の扱いも知らないって、すごい剣幕なんだ」
　床の上で耳を澄ませて聞いていたピウは、オーイがベルトのことを聞きに来たのではないと知って胸をなで下ろした。彼女は階段を下りて庭

にいるオーイの所へ行った。
「オーイ、あんたの母さん、どこへ行くんだって?」
ピウは努めて親しそうな口振りで尋ねた。
「ラックサーオ村の親戚を訪ねて、なくなった物を見てもらいに占い師の所に連れてってもらうんだって。たぶん明日か明後日よ、出かけるのは」
これを聞いてピウはますます胸騒ぎがひどくなった。そして急いでオーイをハシゴが置いてある米倉へ連れて行った。彼女はオーイを前に行かせ、自分は後ろに回ってハシゴを運ぶのを手伝った。
「ベルト、まだ見つからないの?」
ピウは尋ねた。
「まだなのよ、隅から隅まで探したのに。ほんとに惜しいことをしたわ」
「川に落ちたんじゃないの?」

ピウは、人が取ったと信じているオーイの考えを覆そうと努めた。

「たぶん落とさないわ。わたし、しゃがんで水際を探して見たけど、なかったもん」

二人は家の木戸まで来た。ピウは、そんなに重くないから一人で背負って行くようオーイにハシゴを渡した。

夕方になって晩御飯を済ませると、再び村長の家で集会があった。今日は前回よりも大勢いた。みな今回の事件の立会人になりに来たのだ。当事者たちは、モックを持って人のいない部屋を通ることになった。彼らは自分のモックがどんな風なのか、他人に見えないようカゴに蓋をしてモックを持って来た。この方法は、どのモックが誰のモックか、誰にも知られないことを保証していた。各々自分のモックをその部屋に置くと出て来て外にいる仲間と一緒に座った。ピウもモックを持って来た。そのモックは中に灰を入れバナナの葉で包んであった。他人の物を盗ん

だ者が皆するように苦痛や不安を与えた印としてコショウを入れていた。

その部屋にモックが全部置かれた。つまり、モックを持ってくる者はもう誰もいなくなり、全員がその時を待つ重要な時間になったということだ。村長はモックを持ち出して全員の前に置いた。どのモックが誰のモックか誰にもわからなかった。

年取った一人の男性が、一つずつモックを開ける役になった。その年寄りは慌てず急がず慎重にモックを取り出すと、結んだ竹ひごをほどいてバナナの葉を広げ、ゆっくり灰をかき回した。みな目を凝らして見詰めた。

一つ目のモックは灰と唐辛子だけだったので通過した。年寄りは二つ目のモックを開けて二、三回かき回した。そして三つ目のモックを取り上げたものの、前のより多くかき回さなかった。ベルトは大きな塊にな

っているので、注意深くかき回す必要がある指輪やピアスとは違って、モックを開けて一回かき回すだけで有る無しが即わかったからだ。

モックを開ける作業にみな興味津々だった。まるで土から掘り出した金のツボを開けるかのように、皆ほとんど瞬きもしないで押し黙って見守った。十五目のモックまで開け進めたが、目当ての物は見つからなかった。大部分の人が骨折り損に終わってしまうかもしれないと思った。

十六目のモック、十七目、十八目も同じだった。その年寄りは意気込みをなくしたようだったが、役目上、次のモックをつかんで開けなければならなかった。

それは十九目のモックだった。彼は竹ひごをほどいてバナナの葉を開けた。高く盛り上がった灰を崩して広げると、たちまち光る物が現れた。人々の騒ぎ立てる声が家の屋根から溢れた。それは立会人として見に来た人々の笑い声や喜ぶ声だった。モックを持って来た人たちや、誰もそ

の顔を知らないベルトを返しに来た人の声だった。そして、取り分け興奮して涙を流したベルトの持ち主オーイの歓声だった。

大勢の人たちの賑やかに響き渡った声は、今までそうしてきたように、兄弟のように親しみ合い、互いに清らかな心を持って協力し合ったことを表していた。

モック開けは、この十九目をもって終了した。モックはまだ五、六個残っていたが、その年寄りは、これ以上開ける必要はないと見たからだ。

一九九〇年　ワンナシン掲載

彼の表情は、冷静で寡黙、慎重で辛抱強いように見受けられたが、その心中は苛立っていた。彼は、絶え間なく吹き寄せる風の中、サムサー（訳注—Kleinhovia - hospita　熱帯産、大木になる）の木陰になった道端に座っていた。けれど、気を揉んで熱くなっている今の彼にとって、風は何の救いにもならなかった。

その熟練した腕で、彼は針、金づち、更に二、三種の道具を使って、破れたり擦り切れたりした靴を縫った。ほんのわずかな間に、主がはけなくなった靴は再びはける丈夫なものになった。それから彼は、もう片方か別の靴を取って修理を続けた。

彼の前には靴で溢れた木箱があった。ここに置いてある箱は、彼がこの場所で生計を立てている拠点になっていることを語っていた。箱のない日は、大抵雨降りで彼の姿はなかった。普通、彼は毎日決まってこの

場所に来た。ここは通行人の往来が多く、靴を修理してもらいに来る者にとっては便利な通りだった。修理が済むまで待っていて、仕上がると早速はいて行く者もいたし、置いて行き後で取りに来る者もいた。

彼は黙々と靴の修理をしながら、時折、持ち主が一ヵ月以上も前に修理に持って来た、一足の靴にちらりと目をやった。靴の持ち主が取りに来たら、彼には千五〇〇キープもの修理代が手に入る！

その靴は、まだ見掛けが良く皮の状態も良かったので、もったいながった持ち主が、両方とも新しい靴底にしようと修理に持って来たものだった。だから修理代もそれ相応に高くついた。彼は、靴の持ち主は目鼻立ちの整った、やや威厳を持った態度の青年だったことを覚えていた。修理代を見積もって三日以内に取りに来るよう告げた。けれど、その期日になっても持ち主は取りに現れなかった。彼は、数日が一週間、一週間が一ヵ月になっても待ち続けた。一ヵ月が過ぎ、二ヵ月になっても持ち主は取りに来なかった。彼は、金が必要だったので、やきもきして待

った。この時期、ひどく困窮していたから彼は苛立っていたのだ。

彼は一人きりで仕事をしていたが、気持ちは千々に乱れていた。彼の傍らにはニュースを放送している一台の小型ラジオがあった。それは彼の体のあらゆる部分の神経を揺さぶるニュースだった。

「…一九八八年、二月十三日。ボーテンの地方部隊は、敵軍のOV一〇機を砲撃して墜落させ、二人のパイロットを現場で逮捕しました。領域内にある一四二八駐屯地の我が軍は、死を恐れぬ敵軍の兵士いわゆる「赤牛たち」の攻撃を阻止することができました。一三七〇駐屯地の方は、特に大砲によって防空壕が陥没したため、手痛い打撃を受けました。敵側は大砲を使って四時間攻め続け、赤牛たちは駐屯地を二ヵ所とも略奪しようと攻撃してきました。敵軍が防空壕までおよそ二〇〜三〇メートル接近した所で、我が軍は総攻撃をしかけました。戦闘は激しさを極め、赤牛たちは何度も攻撃を試みましたが、両方の駐屯地周囲の防空壕に踏み込むことはできませんでした。一四二八駐屯地、一三七〇駐屯地、

そして、その他の駐屯地も、依然として我軍が堅く守る拠点になっています」

ラジオのニュースはこう続いた。

「全国各地の人々は、こぞって前線にいる兵士に支援品を送る準備をしています。人々はボーテン地域の前線兵士に勝利を祝福して手紙を書くと同時に、現金、生活用品、食料、タバコなどを送っています…」

ここまでニュースを聞いていて、彼は自身がまだ何も寄付していないので肩身が狭いと感じた。そして彼はこの靴の主に腹が立った。千五〇〇キープという金が入ったら、半分を妻に渡し、残る半分は前線の兵士に支援品を買い、国民として村の人たちと一緒にその運動に参加するつもりだった。

彼は客から代金をもらっていたものの、極めて簡単な修理だったから、修理代は高々七〇〜一〇〇キープという、わずかな額にしかならなかった。彼は一日で四〇〇〜五〇〇キープほど稼いだが、その額では家族を

養うのにぎりぎり一杯だった。

彼は時々、あまり長い間持ち主が取りに来ないので、この靴を売ってしまおうと思った。彼が自分で金を出し、新しい靴底を買いに行って取り付けたのだ。もし持ち主が本当に取りに来なければ、金を返してもらうため売る権利がある。でも彼はそう思っただけだった。というのは、買おうと申し出る人はいなかったからだ。

一方では、いずれ持ち主が来るだろうから、取りあえず預かって置こうと思った。持ち主は急に地方へ行くことになり、靴を取りに来る時間がなかったのかもしれない。もしかして、思いがけない問題が起こったことだってあり得る。彼はあれこれ想像したが、どうするか決心しかねていた。

時が過ぎ、ボーテン地方の前線での戦闘ニュースは鳴りをひそめた。ムアンペー村でのラオスとタイ軍の混成委員による会議のニュースばかりだった。人道的、そして相互の良好な関係のために例の二人のタイ

人パイロットを送還するニュースだった。続いて、今回ラオス領土の防衛に当たった兵士に対する勲章授与のニュースがあった。
勲章授与式が終わり、更に三カ月が過ぎた。けれど、靴の持ち主は現れなかった。
彼は以前と同じように、木箱を前にしてサムサーの木の下で靴の修理を続けていた。そんなある日、靴の持ち主の青年が戻って来た。青年は腕の付け根に松葉杖を当て軍用車から降り、ぎこちなく歩いて来た。靴修理の職人は、しばし仕事の手を休め、記憶を辿るようにじっと青年を見つめた。青年の片方の足は切断されていた。
最初、靴職人は靴の持ち主かどうか確信が持てないでいた。けれど、その青年が彼のところへ真直ぐ歩いて来て、靴のことを尋ねたので疑いが解けた。
「僕の靴、修理に持って来たのは、四、五ヵ月前だったかな?」
「ああ、終わってるよ。これだろ」

彼は木箱から靴を取り出した。
「そうだよ。あの時、いくらってことだったかな？」
彼は修理代金を言うのをはばかった。片足だけになった靴の主を見て得体の知れない何かが喉元を塞いだように感じた。彼は我慢できずにこう尋ねた。
「聞いてすまないが、足をどうしたのかね？」
「うん、志願してボーテンの前線へ行ったけど、敵の弾丸に当たって片足切る羽目になってしまったんだ…」
靴職人は驚きのあまり開いた口が塞がらなかった。一方で、彼は今までラジオでニュースを聞くだけだったから、本物の戦士と会えたことを光栄に思った。彼は祖国のために貢献した人に対して並々ならぬ同情を寄せていた。けれど何か言いたいと思うものの、何も言い出せずにいた。青年を送って来た車はエンジンをかけたまま待っていた。それで、彼はけりをつけるようにこう言った。

「そうだったのか。じゃあ、俺、代金はもらわなくても構わないよ」
靴の持ち主は礼を言うと車の方に歩いて行った。靴修理の職人は、その車が視野から消えるまで目で追った。
彼は「自分も国民の一人として一翼を担えたのだ」と思うことで気持ちを晴らした。

一九九〇年

二時間ほど森の中を歩いて来ると開けた場所に着いた。そこは道の右手が田んぼで、左手が綿、ごま、きゅうりなどの畑になっていた。牛車が往来できる程の幅がある道は、群を抜いて高い椰子がそびえる緑茂る木立で行き止まりになっていた。木々に遮られているせいで民家の屋根は二、三棟しか見えなかった。僕たちは道の突き当たりに着き、いよいよ目的地に近づいていた。

僕たち旅のメンバーは三人だった。二人は文盲撲滅に関する情報の収集に来た記者で、物書きという身分の僕は、地方の古い伝統習慣と口承民話を文書として記録しようと探しに来たのだった。

過ぎし日の感情が僕の心に蘇り、地元の人の心持になって故郷の村に戻るような気がした。道端の青臭い草（外国種）の匂いが鼻を突いた。群生した竹が擦れ合ってザワザワと鳴り、遠くからセミのミーンミーン

という声がした…。これらすべてが、自分が故郷に向かって帰りつつあることを感じさせてくれた。実際は、僕たちが向かっているのは、旅のメンバーの一人であるブンカムの生まれた村であったのだが。

ブンカムは、眼前に紛れもなく現れた故郷の景色に興奮しているようだった。

「俺が村を出てから二十年になるんだ。やっと村へ行く入り口が見えてきて、疲れが吹っ飛んだみたいだ。ここの眺めは目に焼きついているよ」

彼は嬉しそうに話し出した。

ブンカムの話によると、彼はこの村で生まれ、八歳の時に母親をなくした。その後、父親は後添いをもらって他の村に住むことになった。戦争中、家族は知らない土地を転々として暮らしていた。が、今ようやく彼は戻って来る機会に恵まれた。彼には母親の兄に当たる伯父がいた。きっとまだこの村に住んでいるはずだが、かなり年老いていることだろう、と言うことだ。

彼は、特に伯父さんにあげようとコンデンスミルクを二缶持って来た。不便な行程のため、これ以上は持てなかったのだ。

「お前のこと、覚えている人いるかな？」

僕は尋ねた。

「誰も覚えていないだろうよ。けど探してみよう。伯父さんの家なら覚えているから」

僕たちは村の人が作っている畑を、目を細めて眺めながら歩いて行った。少し行った所で、左手の畑から野菜を入れたカゴを持って出て来た一人の妊婦に会った。

「こんにちは、この村に住んでるんですか？」

ブンカムが尋ねた。

「ええ、この村のもんだけど…」

僕たちが見なれない顔だったので、彼女は不審そうな面持ちで答えた。

「俺たち町から来たんですよ。俺はこの村で生まれて、長いこと離れて

いて、やっと今、訪ねて来たんです」
ブンカムは妊婦の疑念を晴らすように話を継いだ。
「へえ、そうなの。生まれた子が、こんな大きくなったんじゃ、覚えてるはずがないわね。あんた、誰の親戚になるの？」
僕たちは各々自分の名前を告げた。ブンカムは両親の名前と、まだこの村に住んでいる伯父さんの名前を言い加えた。妊婦は、自分は北地区に住んでいて、プンと呼ばれている者だが、家が南地区にあるブンカムの伯父さんを知っている、と言った。ブンカムは、以前この名前を聞いたことがなかったので、束の間まごついた表情をしたけれど、取り繕ってこう言った。
「そうか、プンさんだね。村の暮らしはどんな風なのかな？」
妊婦は、村の人はまずまずの生活をしている。野菜をたくさん作っても道路が不便なため、他所へ売りに行っても利益はわずかしかないと話してくれた。

24/VII

彼女は僕たちに、田んぼの小屋へ豚に食べさせる草を取りに寄って行くと言って、右手の田んぼに下りようと道から逸れた。ブンカムは肩に掛けた布袋からコンデンスミルクを一缶取り出しながら呼び止めた。
「プンさん、ちょっと待って。このコンデンスミルク持って行って飲んでよ」
「あれまあ、嬉しいこと。あんたにご利益がありますように」
妊婦はこう言うと、僕たちとは別の方へ行った。僕たちは元の道を歩き続けた。
僕は、伯父さんにあげようと持って来た二缶のコンデンスミルクを、敢えて他の人に一缶あげてしまったブンカムの深い思いやりに感心した。ブンカムは満足気にこう言った。
「俺の家族は、こうするよう教えられてきたんだ。特に母さんからは、食べ物を持っている時に妊婦に会ったら、その場で分けてあげること、多少にかかわらず必ず分けてあげるよう躾られてきたんだ。これって、

この村の大勢の人がやってきたことで習慣なんだ。

父さんが、母さんの打ち明け話を俺たちに聞かせてくれたことがあるよ。母さんが俺を身ごもっていた時のことだそうだ。

ある日、母さんが村の外にある畑へ行こうと道を歩いていると、ちょうど一頭の鹿を担いで猟から帰ってきた五、六人の村人に出会ったんだと。肉を切り分ける時、彼らは他の仲間と同じように母さんにも一人分の分け前をくれたそうだ。こうすることは、この村でずっとやってきた習慣で、妊婦の権利になっているんだ。分け前が人より多いのは、銃の持ち主の猟師だけで、二人分の分け前の他に、頭、四本の足、それに鹿の皮をもらえるということだ。

その日の夕方、俺の家族は鹿のラープが食べられた。夜明け前のまだ暗い時に、母さんは男の子を産んだ。その子が、今、生まれた村を訪ねようと歩いているもんなのさ」

僕たちは、それぞれ一斉に、はっと息を呑んだ。もう一人の記者がこ

う冗談を言った。
「その鹿、ブンカムっていう名前の人間になって生まれ変わってきたんだろ！」
「村の人もそう思っているよ。あの鹿がまた鹿に生まれてきたら、生まれ変わる度に撃たれて死んでしまう。村の人の話によると、この辺りの森には、今じゃ、たった一頭の鹿も残っていないそうだ」
ブンカムがこう言ったので、僕は言った。
「残念だなあ」
ブンカムはこう続けた。
「妊婦はお腹の中の子どもに栄養をつけるために、たくさん食べなきゃならないから、食べ物を持った人に出会ったら、まるで象を丸ごと一頭食べてしまえる程、ひもじさを感じるそうだ。
これは妊婦の口から聞いたことだけど…妊婦に食べるよう誘ってくれない人や、食べ物を分けてくれない人を、妊婦に同情しない非情な人

だと、心の片隅で覚えているそうだ。

母さんは、成長して逞しくなった息子を見る運が終になかった。父さんの話では、母さんは撃たれて死んだあの鹿が可哀想だと、鹿の肉を食べようとしなかった。けど、家族に食べさせるために分け前は受け取ったそうだ。

俺が生まれると、母さんはとりわけ俺を可愛がってくれた。ブンカム（訳注ー功徳という意）という名前をつけてくれたけど、母さんは俺を「母さんの可愛いカム」とか「母さんのいとしい子」って呼んでくれたよ…（訳注—子どもを呼ぶ時、「母さんの子」とか、「母さんの…」と呼んだり、ニックネームで呼んだりすることが多い）」

その時、僕たちは村へ入る柵門に着くところだった。僕は、不便な道中だったけど、この村へ来たことに満足していた。けれど、何かの思いに駆られてあの妊婦を見ようと振り返った。最早、彼女の姿は見えなかった、でも、彼女は幻影の中に僕と共にいた。

僕は生まれて初めて、自分が、この世に生まれくる小さな小さな命と
関連していることを意識せずには、いられないのを感じた。

一九九〇年

家の前のチャンパー

かつて我が家の前の道路脇には、甘い実のなるタマリンド（訳注―熱帯産のマメ科高木）の木があった。その木は枝を広げて涼しい木陰になっていた。焼けつくような日差しの時、行き来する人は皆立ち寄って休んだ。それは私が何年も前に植えたものだった。

最初、その木は垣根の内側にあった。ところが後に、ヴィエンチャン市の建設課の方で道路の改修、拡幅工事をしたので、私は垣根を内側へずらすことになった。そのためタマリンドの木は、垣根の外側の歩道になった所に残ってしまった。

そのタマリンドは、実は甘くて美味しく、葉もきれいな緑に茂り、美観を添えてくれた上、家の前周辺を活気づけてくれる木として私たちを楽しませてくれた。雨期に入ると、その木には黄味がかった朱色の花が輝くように咲き、そして地面の至る所に散り落ちた。それから間もなく

高い所の枝や梢に数珠つなぎに小さな実がついた。通行する人は誰もが目を細めて見上げた。

このタマリンドの木陰には、通行人の他に学校の生徒たちが何人も寄って来た。近くにある地区の学校が引けると、彼らは両親や保護者たちが迎えに来るのを待つため揃ってやって来た。学校の制服を着たこの子どもたちは陽気で、座ったり立ったり、ふざけて追い駆けっこをしたりして可愛らしかった。爽やかで快活な笑顔の子どもたちが、ふざけて笑いながら嬉しそうに行き来する様を目にした時は、感動的な絵を見るようだった。

私は、邪心のない、あるがままの彼らの挙動、それに黒々とした髪、赤い頬やふっくらした頬の子どもたちを、じっと見入って何十分もやり過ごすことがあった。時には見とれて三十分も過ごしてしまうこともあった。どんな写真よりも一人で遊んでいる子どもを撮った写真の方を見たいし、大事にしたいと言う人がいた。私はその意見に賛成だ。カメラ

があれば、彼らに気づかれないで密かに写真を撮ることに、より多くの時間を費やすだろう。

子どもたちの歌う声、笑う声、ふざけ合う声、タマリンドを奪い合って騒ぎ立てる声など、私が幼い頃、家の庭で戯れた過ぎし日のことを思い出させた。私は、温もりと清々しさに溢れていた幼少の頃を思い出す度に幸福感に浸った。そして、あの過ぎし日の、あの場所、あの時を今一度取り戻したいと思った。

私は子どもたちがタマリンドの実を竹竿で取って食べても惜しいとは思わなかった。けれど、木によじ登ったり、竿を振り回したりする子がいると心配で何度も大声を挙げた。

「落ちないよう、気をつけるんだよ！　竿が落ちて頭に当たるぞ！」

声を張り上げると一時は静かになった。木の上にいる者は、そろそろと降りて来た。竿を持っている者はそれを捨てた。けれど、私が目を閉じると間もなく再び賑やかな声が上がった。私はよく彼らにこう言った。

「道端のこのタマリンドの木はみんなのものだ。だから分けて食べるんだよ。捨てたりして無駄にしないようにな。この木は町に緑を添えて生き生きとしてくれている。木がある場所はどこでも爽やかだろ」

私の生活は、長い間このタマリンドの木に慣れ親しんできた。花の咲く時期には爽やかさを感じ、葉が散る頃には心に渇きを覚えた。私は草や木が好きだ。だからヴィエンチャン市のあらゆる道路の両側に木を植えて、どこへ行っても涼しい木陰が見られ、道という道は隈なく清々しくて生き生きした街になってほしいと願った。

ところがある日、仕事を終えて帰宅した私は、嘆かわしいものに出くわすことになった。タマリンドの木は切られ、わずか膝の高さになり果てた切り株が残っただけで、枝と葉は地面に乱雑に寄せられていたのだ。家の前はすっかり見通しが良くなっていた。風通しが良くなったのは一目瞭然だが、私の心は身体のどこか一部が欠けてしまったように寒気がした。私は家の前に呆然と立ち尽くしたまま言葉もなく、この道の突き

当たりの大通りまで見渡した。まだ二本残っている木が見えたけれど、上の方が切られていた。その他の木は道一帯に切り倒されているのが見通せた。私は家に入って家人に尋ねた。
「一体誰がこの道の木を切りに来たんだ？」
家内は答えた。
「請負った業者よ！　電線を邪魔してたんですって」
「これこそ乱伐だ。こんなにズタズタに切ってしまって」
「わたし、切らないでって再三頼んだわよ。電線に届いている高いとこの枝だけ切って、枯れさせないよう低いとこの枝は二、三本残しておいてって頼んだけど、あの人たち、聞く耳を持たないの。電力会社の人じゃないもの、請負の人たちだから言っても仕方なかったのよ」
「お終いだ！　人が日よけにする木陰がなくなってしまった！一本の木を植えて、こんなに大きくするには何年もかかるんだ」
私は失望して文句を言った。

「根元から切らないように皆で頼んだわ。道の角に住んでるおじさんが見に来てほしいと市役所に駆けつけてくれたのよ。担当者が来た時は、切るのをしばらくやめたわ。市の担当者は、この通りの木は電線を優に越えているから、低い所の枝は残して切るよう説明したのよ。それで道の角にある二本の火炎樹が、かろうじて残ったってわけ。天辺だけ切られても大丈夫、枯れはしないでしょうよ」

あの日以来、私の家の前には、もう子どもたちの大声やふざけ戯れる笑い声がなくなり、静まり返って寂しくなった。ただ情け容赦ない熱い日差しが、この辺一帯をじりじりと照りつけているだけだった。私の心は渇き切り、もったいないと思う気持ちが治まらなかった。

私は代わりに植える木の種類を何日も考えあぐねた。ミルクの木（訳注—diospyros discolor食用植物、果実はミルクのような味がする）を植えれば良い木陰になるけれど、枝が高く伸びて電線にかかるから始終切られるのを免れないだろう。マンゴーの木にしようか、ラムニャイ（訳

注—竜眼、ムクロジ科の常緑高木、果実はレイシに似る）の木を植えようか。しかし、よくよく考えてみるとタマリンドのように切られてしまうかもしれない。

一方、実の食べられる木は、子どもたちが興味を示してよじ登って落ちでもしたら、命にかかわる危険な目にあうこともあり得る。私は子どもにしろ誰にしろ、木から落ちるのを見たくなかった。それは衝撃的な光景になるだろう。どうであれ、私自身は事故に遭った人より先に心臓が止まってしまうかもしれない。

私はきれいな花の咲く木を植えようと思ったが、探しに行って運んで来る時間がなかった。そこで家の裏側を見に行くに留まった。すると、チャンパー（訳注—Plumeriaラオスの国花。花はジャスミンの香りがし、ハワイなどでレイにする）がちょうど咲いているのが目にとまった。一本は垣根の隅に、もう一本は台所の横に、白く清らかな花が、朝となく夕となく芳香を放っていた。

　私は適当な間隔を置いて、家の前の道路脇に三本のチャンパーを挿し木した。本当はもっとたくさん植えたかったが混み過ぎると思った。チャンパーの木を植えるのは簡単だ。枝を片腕か両腕広げたほどの長さに切って埋めるだけで済む。私は家の前に植えたものとは別に、もっと植えるよう同じ通りに住む大勢の人たちに配った。皆、励んで均等に間隔を空けて植えてくれた。こうすることで、私は気持ちが晴れて嬉しかった。そして、町の人も同じように感じてくれていると信じた。

　私は新しく植えたチャンパーの木に、人や家畜がぶつかって折れたり、倒れて枯れたりしないように柵で囲い、水をやって精を出して養生した。朝、昼、晩、私はひたすらチャンパーの木の世話に勤しんだ。時が過ぎ何カ月も経つと新芽が出て来た。それから少しずつ伸びていき、どの枝にも瑞々しい緑の葉がついた。

　更に何年も経ち、我が家の前の通りは、端から端まで涼しげな木陰ができた。肉厚の葉を持つチャンパーの木は、高くも低くもなく格好の木

陰になった。雨や風、日差しを受けて季節を問わず花が咲く木に成長した。チャンパーの花はラオスの誉れだ。

我が家の前は再び活気を取り戻した。人が木陰に涼みに来た。子どもが来て大声で戯れ遊ぶようになった。彼らは皆でチャンパーの花を拾い集めた。紐を通して花輪を作って、首や腕を飾る子どももいた。様々な人と出会える者にとっては感動的な光景だ。

一九八〇年

父さんの友だち

土曜日の夕方、私は七歳になる娘と一緒に、のんびり散策でもしようとメコンの川沿いへ出かけた。ところが、足が雑多なガラクタに当たってとても寛ぐ気分にはなれなかった。並んで歩いていた娘は、前になったり後ろになったりして始終立ち止まった。というのもケバケバしい色の空き缶など行く手を阻む物を蹴るのに夢中になっていたからだ。

一九八九年のボートレース大会が終わって丸一週間経っていたが、ヴィエンチャン市の前を流れるメコン川の土手は散らかったゴミで溢れ返っていた。ビニール袋、包装紙、新聞紙、竹串、ビールの空き缶、タバコの空き箱、破れた風船などが、至る所に散乱して、あたかも暴風が通過した街の状態を呈していた。これらすべては多くの人にとって目障りになっていた。

私は、汚れていないものを探して爽快な気分になろうとして、自然に

見えるまだなお淡い色の雲が漂う、蒼い空が果てる遥か彼方を見渡すことで散乱したものから視線を外した。

夕方のメコン川は陽光に映えてキラキラとリズミカルに流れていた。遠く視野の果てに流れに任せて浮いている小舟が、何列にも重なり合った山並みの景色に貼りついて停まっているように見えた。太陽は川岸に沈みつつあった。鳥が集まって三つ四つの群れになって巣に向かって飛んでいた。時々、鳥と舟が空の縁と交わるように見えた。それは黄昏の雰囲気の中で涼しさを感じさせてくれ、遥か彼方の平和を求めて飛んで行きたような思いを起こさせてくれる光景だ。

しかしながら、地面の残骸は、夢見心地でいた私を覚まし現実に直面させた。私は見たくなかったが、目の前にあるため見ざるを得なかった。私はガラクタを拾って然るべき場所に置きに行って、自身が清掃に参加しようと考えた。でも、特に今日という日は、せっかくメコンの川岸の景観を楽しみに、それなりに身支度して来たので取りあえず勘弁願いた

かった。現実の状態がのどかに散策するのに相応しくないために、この先も嫌々ながら歩かなければならない。こともあろうに、こんな見苦しい物に出くわすとは思ってもいなかった。

考えながら歩いていると、娘が怖そうな顔をして駆け寄って来て、私の腕に抱きついたので私はハッとした。娘は走って来た方を振り返った。私はその方を見て娘が怖がる理由を知った。

「怖がらなくてもいいよ。彼は何も邪魔しないから」

私は娘にこう言った。

娘が怖がっている人物は、自分が周囲の人や通行人の視線の矢面に立っているのに、気にする様子もなく歩いて来た。彼は薄汚れた服を着て、紙くずやビニール袋を体にくくり付け、まるで動くゴミの塊のように見えた。彼が近づいて来た時、彼の片方の肩に結わえて輪にした物が見えた。その輪は、紙くずを詰め込んだビニール袋で、カエルの足を紐で結んで繋げた格好に似ていた。彼は別の輪を左手に持っていた。ビニール

袋や紙くずが行く手を妨げると、彼はかがんで右手で拾い、左手の輪に繋げた袋に押し込んだ。彼の動作は人々の興味を引いた。それを目にした人たちは、怪訝そうに彼を見たり、薄笑いをしたり、仲間と囁いて振り返って彼を見たりした。恐らく多くの人は、彼はビニール袋を集めて洗って業者に売りに行くのだと思ったことだろう。だが、そうすることは不可能だ。彼は何にも使えない、汚れ切った紙くずや破れたビニール袋ばかり拾っているからだ。

私は昔からこの人物を知っていた。彼は狂気半分、正気半分の、いわゆる精神病者で、別けても彼は私の友人だった。私たちは同級生同士で、当時、キンノーン学校（訳注―キンは食べる。ノーンは寝るの意）と呼ばれていた学校の寮で生活していた。

彼はニャンという名前だった。学生時代は勤勉で決然として勉学に励んでいた。そのため大勢の友人は、からかってこう注意していた。

「気をつけろ、いかれちゃうぞ」

そういうニャンが、クラスで常に成績が良かったことは不思議でも何でもなかった。そして、何年もして彼が理性を失ったこと、もしくは「いかれた」こともまた不思議ではなかった。私は、彼がガリ勉だった他にも、異常なほど几帳面だったことを憶えている。彼の机はきちんと整理され、ノートやペンなどは机の上に区別して置かれていた。一度、友人の一人が彼の消しゴムを借りて行った。使い終わったその友人は消しゴムを投げ返した。それは机の上に落ちた。彼はその友人のところに行くと、消しゴムを元あった場所に置くよう言った。この件は長い間仲間の語り種になった。

ニャンは外国へ留学した。私は国内の専門学校へ進んだ。そしてニャンからの音沙汰はなくなっていった。何年も過ぎ、私は過去を忘れ、ニャンという友人がいたことも忘れていた。ある日、私は仲間からニャンがいかれて正気を失ったことを聞き及んだ。彼は大学の最終学年まで進

みながらも修業しないで生まれ故郷へ帰って来た。
私はたまに彼と出会った。彼は、いつもある寺につくねんと座って、散る葉をじっと見つめていた。葉が散ると、ニッコリしたりニヤニヤしたりしながら、葉を集めて棒に刺して何度も何度も数えた。まるで境内から出た葉を拾ったことに大満足したように。
時々、道ですれ違うと、私たちは顔を見合わせた。彼は笑顔を作っても何も言わなかった。私は会釈してこう尋ねた。
「ニャン、元気か！」
彼は答えなかった。私の方も知った者同士の挨拶で、習慣として尋ねたまでのことだから返答があるとは思っていなかった。
私は娘を連れて歩き続けた。娘に危なくないことを信じさせるために手をつないだ。彼は真直ぐ歩いて来た。私たちの間隔は三メートルほどになった。私は何も言い足さずに、いつものように彼に挨拶した。

24/VII
ห้ามจำหน่าย

「ニャン、元気か！」
彼はガラクタをぶらぶら体につけたまま、挨拶に応えないで通り過ぎた。娘は後ろを振り返ってから、こう尋ねた。
「父さんの友だちなの？」
「ああ、そうだよ」
「ああいう父さんの友だち、何人いるの？」
「一人だけだよ」
私はこう答えたものの、娘の質問を訝っていた。
「わたし、父さんに、ああいう友達がたくさんいてほしいな」
「どうしてそんなことを言うんだい？」
娘は説明した。
「ああいう人がたくさんいたら、メコン川の土手にはゴミがなくなるもの」

一九九一年

五〇キープ

木々の葉が浅緑になっている。セミの鳴き声が賑やかだ。日差しはいつもより強くて、風はそんなに強く吹いていない。天気は蒸し暑い…ということは、夏も真っ盛りに入ったのだ。

僕は家の前の木陰に座ってセミの鳴き声を聞いていた。全然鳴きやもうとしない一本調子のジージーという声は、合唱になって方々から聞こえてきた。セミの声は、機嫌の良い人には面白く、不機嫌な人には耳障りに感じる。僕にとって、この自然の音楽は思いを遠くまで運んでくれるように感じるし、喉が渇いていなければ座ったまま夢を見ているようにも感じる。僕は冷たいものが食べたかった。特にいつも家の前を通る人の甘いアイスクリームを食べたかった。今日はまだあのアイスクリーム屋の鐘の音が聞こえないけど、直にこの辺にやって来るだろう。

家の門の所でカムトゥという名前の五歳になる子が一人で遊んでい

た。カムトゥは、僕の母さんの一番下の妹になるピン叔母さんの息子だ。ピン叔母さんは三年前に旦那さんを亡くしていた。叔母さんは二人の子どもを連れて町へやって来た。一人はマラリアに罹ったので病院で治療をしてもらいに、もう一人はこのカムトゥで、僕の家族に預けに連れて来た。八歳の長男は田舎でおじいさんと一緒にいた。ピン叔母さんは着いた日からずっと病院で子どもに付き添っていた。

カムトゥははきはきした子だ。あいつの質問は皆を笑わせた。着いた早々、直ぐ僕に聞いてきた。

「兄さん、小学校何年生？」

「もう小学校は終わって中学にいるよ。カムトゥは何年生だ？」

「まだ学校へ行っていないよ」

「いつ入るんだい」僕は尋ねた。

「手で耳を掴めるようになってからだって言われてる」

「どうやって掴むんだい！　やってみな」

するとカムトゥは右手を挙げて頭を越して左耳を掴もうとしたが届かなかった。ということは、学校へ入られるほど大きくなっていないってことだ。僕はこのカムトゥの話から、田舎で学校へ入る子どもを選ぶ方法を知ったばかりだ。カムトゥは僕にこう尋ねたことがあった。

「兄さん、セミを捕まえられる？」

僕は、そんなことできないし捕まえたこともない、夏に入った時、鳴き声を聞くだけだと答えた。すると、カムトゥは長さ二メートルほどの細い竹竿を探して来た。家の裏の木になっているジャックフルーツからヤニを取って来て、竹竿の片方の端へくっつけた。それからセミがやかましく鳴いている木の下へ入った。そうして竿の先がやっと届く高い所にいるセミの方へ竿をそっと伸ばした。間もなく、竿にくっついて羽をばたつかせてもがいているセミが見えた。セミはヤニから逃げようと必死にばたついていたけど無理だった。カムトゥは自分の腕前に満足したような素振りで僕にセミを見せてくれた。

「うまい。ほんとにうまいな！」
　僕は感心して言った。
「一匹で充分だ。他のは鳴かせておけよ」
　カムトゥは田舎の生活から、僕が今まで知らなかった色々なことを学んでいた。僕はたくさんのことをあいつから教わった。それと同時に、町についての多くのことを教えてやった。道路の歩き方、安全な横断の仕方、掃除のことなどを話した。あいつが一番満足したことは、僕のバイクの後ろに乗って方々へ出かけることだ。あいつの様子を見ると最高に幸せそうで、僕の言うことはどんなことでも聞き入れた。時々、止めてあるバイクに乗って、あちこち手で触ったり撫でたりしていた。僕は何気なく尋ねてみた。
「トゥ、村でこういうのに乗ったことあるか？」
「ないよ。木馬（訳注―バナナの幹で作った遊具）に乗っただけだ」
　来たばかりの頃、あいつの母親が妹を入院させる前に、母親は言い聞

かせた。おじさんやおばさん、兄さんや姉さんの言うことを聞いて、誰にもお金をねだってはいけないと。

「母さんは、お金がたくさんないから、あれ買って、これ買ってとねだるのをやめるんだよ。トゥがお菓子を買うお金をせがんだら、母さんは妹を治す薬を買うお金がなくなって、妹はもっと悪くなってしまう。トゥは妹を好きだよね？」

ピン叔母さんはやさしく、でも、はっきりと子どもにこう話した。

カムトゥはこっくり頷いて何も言わなかった。カムトゥは家族の中で他の誰よりも僕によくなついた。あいつは僕が教えることは何でもかんでもやった。いつも僕のバイクの後ろに乗せてもらいたかったからだろう。けど、たいていカムトゥは、僕が教えると、どんなことでも呑み込みが早く、賢い子どもだった。

アイスクリーム売りが姿を見せるのを待つ間、セミしぐれの中で時間の経つのがものすごく遅く感じられた。門の扉の方に目をやると、道路

の舗装を溶かすほどの強烈な日差しの最中でも、人がひっきりなしに行き来しているのが見えた。

ついに遠くからアイスクリーム売りの鐘の音がした。僕はカムトゥに、お金を取りに来て門のすぐ前の道路脇で買うよう声をかけた。

「五〇キープ札が二枚で一〇〇キープあるから、一個五〇キープのアイスクリームを二個買うんだよ。一個はトゥにやるから食べろ。一個は僕のだ」

あいつはお金を受け取ると門へ走って行った。直ぐにアイスクリーム一個だけ持って戻って来た。僕は変だなと思った。もしかしてアイスクリームが高くなって一個一〇〇キープになったんだろうか、それとも売り手が子どものお金をごまかしたんだろうか。側に来たから僕は尋ねた。

「どうして一個しか買わなかったんだ？」

あいつは答えないで一個のアイスクリームを僕に差し出した。僕は、はっきりさせようとまた問いかけた。

「一〇〇キープあったのに、どうして一個しか買わなかったんだ？」
あいつは見るからにアイスクリームを食べたそうな顔つきをして小さい声で言った。
「五〇キープで兄さんのを買ったんだ。あとの五〇キープは、とっておいて妹の薬を買うように母さんにやるんだ」
僕はアイスクリームを口に入れようしたけど、喉が何かで詰まったような感じがして、食べたい気持も喉の渇きもなくなってしまった。その代わり、あいつをかわいそうだと思う気持がこみ上げてきた。もう一つ買いたくても、売る人は遠くへ行ってしまって間に合わなかったから、一個しかないアイスクリームをカムトゥにあげた。
「トゥ、食べな。兄さんはたくさん食べてきたから、いいよ」
カムトゥは片手でアイスクリームを持って口に含んだ。別の手には、五〇キープ札をしっかり握っていた。

一九九〇年

ディックとデーン

ディックが目をあけて知らん顔をして寝そべっているのを見るたびにボクはうんざりしちゃう。ボクたち家のもんが学校や仕事から帰って来ても、ヤツは尻尾をふったり、走って来て手や足を嗅いだりなんてしない。ヤツは誰も気にかけずに、のうのうと寝ているだけだ。せいぜい立って前足を伸ばして口を開けてあくびをするぐらいだ。家のもんが呼びもしないし指も弾かないと、ヤツはだるそうにまたゴロンと寝転んだ。

「おい、ディック！　やれやれ、おまえ、寝そべってばかりいて本当に不精もんだよ」

　母さんはヤツが家の床下で、のほほんと寝ているのを見ると、いつもこう文句を言った。

　ボクが食べ物を持って来た時は、いつでもディックのヤツ、パッと起きてハアハア息を切らして恐る恐る走って来て、前足を高く上げてボク

の手や足に飛びかかって取ろうとした。デーンが分けてもらおうと側に寄って来ると、ディックは、この家にゃあな、犬はオレ様一匹しかいないんだぜ、と言うように仲間を恐がらせようと歯をむき出してウーウー唸った。ボクはディックのそんな態度に腹が立って我慢できなくなって、何度も薪を掴んでヤツの背中を叩いた。ヤツのわめき声は、今ここで死んでしまうかのように家中に響いた。ボクは大して強く叩いていないのに、ディックがどうして大げさに鳴き叫ぶのか、ボクは知っている。時々そっと叩くか、棒を振り回しているだけなのに、ディックのヤツ、飼い主に聞こえるようにワンワン鳴いた。ディックが鳴いた途端にブントーの声がした。

「誰だ、オレの犬を叩いてるのは？」

ディックの主人は、いったい何事が起こったんだと聞いてきた。

「ヤツがデーンの分を食べようとしたんだ。まだ叩いてないよ。棒を見せびらかしただけだ」

24/VII
ห้ามจำหน่าย

　ボクはこう言い逃れた。
「叩かなきゃ鳴かないだろ、気をつけろよな、まったく！」
　ブントーは癪に障ったようにボクを脅した。なに言ってんだい、ディックがデーンを脅すのと同じじゃないか。
　餌をやる時は本当に嫌だ。ディックはパクパク音を立てて食べる。早いのなんの、見る見るうちに食べ終わって、デーンの皿に押かけて図々しく横取りして食べた。おまけにデーンを脅して歯をむき出した。餌をやる時は、いつもディックがデーンの分を取りに来ないように見ていなきゃならない。そうしないと、ボクの犬デーンは一度だって満腹することはない。ディックに脅されて腹一杯になる前に、自分の皿から逃げ出すからだ。
　ボクは何度も汁と混ぜたご飯を、デーンの皿にはたくさんよそっても、ディックの皿にはほんの少ししかよそわなかった。そうして棒を持って構えた。ディックは直ぐにデーンの皿に走って来た。ボクが棒を持って

いるのを見ると、ヤツはじっとして舌なめずりをして、行ったり来たりしてボクの顔色をうかがった。ヤツの態度は、デーンの分を食べようと押かけても棒で叩かれるし、満腹じゃないから横取りしなきゃ腹がすく。さてどうしようかなと迷っているようだった。ボクがよそ見をして気にかけていない振りをすると、ディックはそろそろと歩いてデーンの皿に近づいた。ボクはディックの飼い主ブントーがいないかそっと見回した。近くにブントーがいないとわかると、ボクは棒を振り上げてディックの背中を思い切り叩いた。ヤツはありったけの声を上げて走りながら、ケガをしたと苦しそうに、まるで今にも死にそうだというように、ワウーワウーと鳴き叫んで、ブタ小屋の下へ逃げて行った。

　そりゃあ、二匹の犬に偏って餌をやるのは正しくないことだけど、ディックは怠けもんで、知らない人が家に入って来ても、いつもデーンにワンワン吠えさせて、一回だって吠えたとこを見たことない。だから、こういう風に餌をやる方が似合っているんだ。家の人たちは、ディック

を飼って二年以上たつけど、ヤツが吠えたのは、気が狂った人が頭陀袋を肩にかけて、よれよれの服を着て物をもらいに来た時の、たった一回だけだと今でも話している。このことはいつでも話に上って、その度にブントーは嫌な思いをしていた。本当はディックだってけっこう吠えているんだけど、めったに吠えないから、家の人はヤツが吠えた時のことを忘れているのさ。

ブントーは、いつだってディックをかばって言った。おまけにデーンはやたらに吠えるとデーンの悪口まで言った。彼が言うには、ディックは無口で頑固なんだ。子どもらは何であんなに恐がるんだろう。ヤツはちょっとウーと唸るだけなのに。ヤツは唸るだけで恐がられるから吠える必要はないんだと。子どもらは皆で大げさに言っているだけなのさ。あのデーンときたら何でもかんでも吠えまくる。ちっぽけなことで吠える。葉っぱが落ちても吠える。耳ざわりだ、まったく！　吠えてばかりいるから子どもらは恐がらなくなって、吠えてるとこを見るのが当たり

前になった。おまけにヤツを吠えさせようと、からかいに来るようにさえなった。ディックは吠える時をちゃんとわかっているんだ…とさ。

ボクは、ボクの兄さんブントーを冷やかして言った。

「フン、吠える時をちゃんとわかっているんだと！　吠える時は、いつだって他所のニワトリが死んだ時じゃないか。それで母さんはしょっちゅうニワトリ代を払いに行ってるんだぜ。近所のニワトリが入って来る度に、ディックは追っ駆け回して噛み付いて死なせてしまう。そうでなきゃ、毛を抜いて羽根を折ってしまうじゃないか」

ブントーは自分の犬の良いところをこうほめた。

「いいヤツだろ、ディックは、ニワトリを家の外へ追っ払ってるんだから。吠えてばかりいて、うるさいデーンよりましさ。デーンは病気になったような歩き方をしてるじゃないか。ディックは強くて堂々としているから人はみんな恐がるんだ。だから勇んで家の中まで入ってくる人は誰もいやしないのさ」

「オレにケンカを仕掛けてきても恐くないさ。ヤツはメチャ怠けもんじゃないか。あんなにたらふく食べるんだってヤツの主人と同じだ」
ボクがこう言う度に、ブントーは走って来て頭突きをした。すると母さんがボクをかばってくれた。それでボクはディックの飼い主の指ゲンコツから避けられた。
「このー、テムめ、今にきっと懲らしめてやるからな、見てろよ…」
ブントーは憎らしそうに言った。
ボクたち兄弟二人は、特にディックとデーンを飼うようになってからケンカばかりしていた。…ボクは始め、ブントーのことを、呼び慣れていた「バック・トー（訳注—バックは接頭辞、男の子や犬などの呼び名につける。トーはブントーの略称）」と呼んでいた。けど、父さんと母さんに、犬を呼ぶみたいで聞えが悪いから「バック」をつけて呼ばないよう、しょっちゅう注意されていた…。
ブントーが北の地区に住んでいる友達からディックをもらって来て

先に飼い始めた。その時、ディックは生まれて三ヵ月ぐらいだった。ブントーとボクは一緒になってディックの面倒をよく見た。なるたけ美味しいものを探して来て食べさせたからヤツは太って見かけがよくなった。ボクたち二人はディックを抱きたくて、何度も取り合いになって、ありったけの力で殴り合った。取っ組み合ってホコリだらけになった。終いには、大声で大人を呼んで離してもらうことになった。

ブントーは十一歳でボクより一つ年上だ。殴り合った後でボクたちはまた一緒に遊んだ。でも直にまた殴り合いになった。いつでも殴り合った後は、前よりもずっと仲良くなったような気がして、笑いながら一緒に遊んだ。時々、ボクたちはちっぽけなことで笑った。

例えば、家の前にあるチャンパーの木から花がたまたまブントーの頭に落ちた時、ボクたちは可笑しくてたまらなくて笑い転げた。とうとう母さんが、うるさいから静かにしてと大声を上げた。

一度、ディックが手や足にじゃれてきた時、ボクはよろけて倒れそう

になった。ブントーは大きな声で笑った。始め、ボクは人に笑われることが嫌だったけど、ブントーがお腹の皮がよじれるほど笑っているのを見て、ボクは我慢できなくてつられて笑い出した。笑っているブントーが可笑しかった。ボクの声もブントーの声も喧しかった。ボクたちはそろって長いこと笑っていた。夕方になって晩ご飯を食べてから、ボクたちは顔を見合わせて、自分たちが笑い転げたことを思い出してまた笑い出した。

　ディックをもらって飼い始めてから二ヵ月経った時、ボクはペンおじさんから子犬を一匹もらって来てデーン（訳注―痩せこけの意）と名づけた。ヤツが痩せっぽちだったからこういう名前にしたのだ。ボクはヤツにミルクを飲ませて、たいがいの時間ヤツを抱いて、ヤツとじゃれて遊んだ。大きくなってくると、ボクはヤツに美味しいものを食べさせて、せっせと可愛がって世話をした。誰かがボクに持って来てくれたものは、いつもデーンに分けてやった。だからデーンはたいがいボクよりもたく

さん食べた。
ボクはデーンだけに夢中になって、ディックのことをほとんど忘れていた。たまたまブントーが留守の時に一回、ディックに餌をやったぐらいだ。ボクはデーンの毛を撫でて、ヤツを胸に抱きかかえた。朝起きて顔も洗わないうちにデーンのとこへ行った。ボクはデーンが好きでたまらなかった。食べ物をもらうと先ずデーンにやった。その時によってディックを後に回して、おまけに少な目にやった。時々何もやらなかった。だからディックはデーンの分を取って食べるようになった。ブントーが何かを持って来た時は、先にディックに食べさせてからデーンにやった。それにボクの犬デーンは、何も食べられない時があるんだから同じことだ。どんなことだって人それぞれのやり方があるのさ。
時が過ぎて、デーンは見違えるほど太って背も高くなってきたけど、ディックには敵わなかった。ディックの方が大きくてがっちりしていて、噛みつき合うとデーンはいつも負けていたからだ。デーンに勝ち目がな

いと見ると、ディックはいつもイヤというほどいじめた。たとえば、あれもこれもと取り合って食べている時のディックはどうしようもない。ふざけた後、ディックは怒り出してデーンにこっぴどく噛みついた。だからデーンはそこらじゅうに聞こえるように鳴いた。その声を聞くとボクはデーンを助けに駆けつけて、ディックを棒で叩いて追い払った。ボクがディックの頭を叩くと、いつもブントーの頭まで伝わった。

二匹の犬が噛みつき合った時は、決まってボクたちのケンカになった。ケンカになると殴り合いになった。ということは、犬二匹が噛みつき合った後で離れても、ボクたちはまだ噛みつき合って殴り合っていたから、母さんに来てもらって引き離してもらうということだった。時々、取っ組み合いをやめさせようと、母さんはボクたちに二、三回平手打ちをくらわした。それでようやく静かになった。

あのデーンのことを、ボクは褒めるつもりはさらさらない。けどヤツは本当によく吠える。小さい時はキャンキャン吠えた。目につくものは

何にでも吠えたし、でっかい犬が家の前を通っても恐がってキャンキャン吠えた。大きくなると、よけい吠えるようになって声も大きくなった。ブントーが言うように、息もつかないように吠えた。

ディックはちょっとしか吠えない。どこへ行くのか知らないけど、家にいるのが好きじゃないから、あんまり吠えることないいんだ。ヤツが家にいる時は決まって寝ていた。だから人が家に入って来るとデーンが先に吠えた。ディックはぐっすり寝込んでいて、デーンの鳴き声が聞こえると、やっと目を開けた。家に入って来る人は、よく知っている人か、親戚の人かもしれない。それに家の人に、もう吠えなくてもいいと言われるから吠えようともしないんだろ。

「シイッ！　デーン…」

これはデーンがいつも聞く言葉で、吠えてはいけない、危ないことになるから姿を見せてはいけない、という意味であることを、よくわかっていた。

24/VII
ห้ามจำหน่าย

デーンが先に吠えることは、性格みたいになって慣れっこになってしまった。一緒にいる時、人が家に入って来たら、ディックはデーンに先に吠えさせて自分は後に続いて吠えた。けど、ヤツはデーンの声を消すかのように躍起になって、もっと大きい声で吠えた。デーンが吠えるのをやめるとディックもやめた。デーンが吠えない時は、家に来た人はボクたちと親しい人ということだから吠えなくてもよかった。それに吠えても、こう言われることになった。

「シイッ！　ディック、デーン！」

要するに、デーンはディックよりずっと大勢の人を知っていて人気があるということだ。ディックの方は家にいるのが嫌いで、いつも村の中か市場の辺りにいる仲間とうろついているから不良の経験は多かった。だからヤツはデーンより、たくさんの悪さをいろいろ知っていた。

ボクとディックは全然合わなかった。ヤツがデーンをいじめるとボクは必ずヤツを懲らしめた。すると、ヤツのボスはボクをもっといじめる

か、おどした。
ボクが家に帰ると、いつでもデーンは走って来てボクの回りをグルグル回ったり、手や足を舐めたりして迎えてくれた。ディックときたら平気な顔をして、のんきに寝ていた。でもボクがデーンに食べ物を投げると、いつでもディックはパッと起きて駆けつけて奪い取るんだ。
ディックだってヤツのボスを偉いと思っているさ。ブントーが家に入って来ると、いつもディックは頭を上げるか、むっくり立ち上がることだってある。ブントーが指をパチンと弾きでもしない限り、ヤツは立ちもしない。ヤツは昨日の夜、市場の辺りへ仲間とくり出したから寝る時間がなかったんだろ。ディックがヤツのボスの手や足を舐める時は、普段と違う日か、ボスが食べ物を持って来てくれたせいなのさ。
ある日、ブントーとボクは、家からそんなに遠くないメコン川の土手沿いの道へ、ぶらぶら歩いて出かけた。いつものようにディックとデーンもお供をして、あちこちのにおいを嗅ぎながら先を行っていた。その

うちに自動車がボクたちを追い越して走って行った。車に乗っていた人は、半分ぐらいになったパンの食べ残しを道端にポイと捨てた。その人は犬にやろうと捨てたのか、どうしてなのかわからない。デーンがその近くにいたから駆け寄ってくわえて先にパンをものにした。ディックも駆けつけて不良みたいにデーンに飛びかかって取り上げようとした。デーンは離すもんかと起き上がって、道の向こう側へ走って行った。ディックは急いで追い駆けた。

けど、ディックが道を渡り切らないうちに、もう一台の自動車が同じようにスピードを出して走って来た。ディックは車にぶつかって道路の外側へはじき飛ばされた。ヤツはその場に横たわって痛そうにウォーンウォーンと鳴いた。しばらくすると起き上がって、足を引きずりながら家に帰った。

その車は、そのまま行ってしまった。ブントーときたら、車の後ろに向かって怒鳴っただけだった。

ボクは犬を二匹とも叱りつけた。
「取り合ってばかりいるからだ！　見てろ、そのうち二匹とも死んじゃうぞ！」
二匹の犬が奪い合って食べている時、あっちにもこっちにも味方しなかったのは初めてだった。

一九七四年

母が留守だった時

母が遠くへ行って留守だった時、気持ちは落ち着いていたけど、僕の心には母についての小さな事柄がはっきりと浮かんできた。

母は祖父、言い換えれば自分の父親の世話をするためにパークセーへ出かけた。祖父はかなり年取っていたし糖尿病も患っていた。その祖父が母に来るよう手紙で言ってきたのだ。母は祖父のたった一人の娘だった。母は結婚して一年過ぎた頃、父に連れられてヴィエンチャンに来た時から数えれば、生まれ故郷を離れて二十年以上経っていた。母の子はどの子も皆ヴィエンチャンで生まれた。僕の一番上の兄は結婚して家を離れていた。続いてポーン姉さんで、市営の商店に勤めていた。その次が中学三年に在学中の僕で、末っ子はカムという名の十歳の弟でまだ小学生だった。

母が出かけてから一ヵ月になるけれど、僕には一年も経ったように感

じられた。母は十年ほど前にも一度祖父を訪ねたことがあった。その時はこんなに長く出かけていなかったことを、おぼろげに憶えている。
　母がいつも顔ふきタオルをかけておく物干し場の竿には何もかけてない。市場や近所の家に行く時にはく靴も見当たらない。ホコリを掃く方を上にして壁の隅に片付けて置くほうきは元の場所にない。母が立てかけて置くのは、穂先が折れたり曲がったりしないようにするためだった。そんな風に立てて置くのは母だけだった。
　母は控え目で無駄遣いをしない人で、皆に節約するよう言っていた。例えば、部屋から出る時は電気を消すこと。洗濯する時は洗剤をちょうどに量ってたくさん使い過ぎないこと。水を飲む時は溢れこぼして捨てないように注ぐこと…など、母はどんなこともうまくやり繰りしていた。なのに、節約の方針と反対の行動をとることがあった。それはいつも一回に一束か二束タムニン菜を買ってくることだった。食べても食べなくても買って来て、そのままにして毎度のこと腐らせて捨てていた。

僕は母がタオルを干していた所を手で撫でながら、家の入り口を見た。

僕は、母が食べ物を入れたカゴを下げて、疲れた様子で市場から戻って来る姿を見慣れていた。走って行って母の手からカゴを受け取って菓子をもらうのがいつものことだった。

「母さん、またタムニン菜を買って来たね。前のもまだ食べてないのに」

僕はよくこう言って注意した。

母は何も言わなかった。多分、時間をかけて説明するには問題にならないほど些細なことなんだろう。—タムニン菜一束は、どれほどのものでもないし、買い置いても、どうということはない—母はこう考えていたのかもしれない。

父もこう文句を言ったことがあった。

「買って来ても料理しないで放って置いて、腐らせて捨てるだけじゃないか」

母は事を大きくしたくなくて、そのままやり過ごそうとしたのだろう、

返事をしなかった。ところが、大切なこととなったら容易に済ませなかった。母は父が声を和らげるまで言い返した。

普通、子どもである僕たちは、よく母が細かいことで小言を言っても母の側についた。小言は心配しての言葉のようでも、説教のようでもあった。母の小言は天国からの声のように聞こえた。僕は、母の小言を聞く方が、母のどんな声も聞かないより良いと思う。なぜなら少なくても僕たちには母親がいるということだし、母はかけがえのない人だから。

僕は孤児ではないけど、母親の声を聞いたことがない人の生活は、飛べるほど羽が丈夫になっていない小鳥が、強い風に吹かれて巣から落ちてしまったように寂しくて惨めだろうと思う。だから僕は母が危険な目にあわないで早く帰って来てくれるよう願った。

母のことを思い出していたら涙が浮かんできた。僕は、今回、母が帰って来たら、母が必要とすることを何でもやって、どんな事も母が望む通りに行動して、もう文句や小言を言わせないようにしよう。

僕は、自分の性格が変わり始めてきたことや、考え方も変わってきたのを感じた。そして、何よりも大きな変化は、自分に対して以前より責任を感じるようになったことだ。僕は母に代わって母のやり方を思い出してその通りにやった。

＊　＊　＊

間もなく母は手紙を送って来た。母は封筒を父宛にしていたけど、手紙の内容は家族全員に宛てたものだった。祖父の病状が良くならないので、帰る日がまだはっきりしないと書いてあった。母は僕たちに見せようと、とって置きの写真を送ってきた。それは母が七、八歳の子どもだった頃、パークセーの市場で野菜を売っている時の写真だった。その当時のパークセー市街の開発と経済的な発展を宣伝するために撮影されたもので、偶然に母が写真の中に写っていたと言うことだ。

母はこう書いてきた。幼い頃、下校すると、もっぱら垣根沿いの畑で、タムニン菜、イルート菜、カ菜など色々な野菜を摘んで売りに行った。

野菜が売れてお金が入ると貯めておいてノートや鉛筆などを買い、いくらかは母親に渡した。家庭が貧乏だったから家族を助けるためにどんなことでもやった。野菜の売り場は、市場の入り口の道端に新聞紙を敷いて、束に結わえた野菜を並べて置いたものだった。値段は野菜の種類によって一束五キープか一〇キープだった。タムニン菜はイルートより高くてカ菜より安かった。人が近寄って来るとこう呼びかけた。

「奥さん、買って下さい。お姉さん、買って下さい…」

快く買ってくれる人もいたし、同情して一束一〇キープのものを二〇～三〇キープも出して買ってくれる人もいた。こういうお金を手にすると嬉しかったから、下校後ほとんど毎日のように垣根沿いの野菜をせっせと摘んで売りに行った。

母はこうも書いてきた。時々警察官が締め出しに来た。売り場が市場へ歩いて来る人にとって、邪魔になるので道端で売らせないようにするためだった。捕まれば罰金を払わなくてはならないから、野菜を抱えて

24/VII

走って逃げた時もあった。運が悪い時は、お金は得られず野菜はグチャグチャになってしまい二度と売り物にならなかった。そんな時は、涙を手で拭いながら泣き泣き家に帰ったものだった。

僕たち、ポーン姉さん、末の弟のカム、それに僕は皆で覆い被さるように母の写真を見た。そしてそれぞれに、小さい時の母さんは僕に似ていると言ったり、ポーン姉さんに似ていると言ったりした。でも、まぎれもなく確かなことは、無邪気な女の子が、市場の入り口の道端に座って野菜を売っていることだった。

母はこの頃の生活を子どもたちに話してくれたことは一度もなかった。話すには心苦しいか、話したら我慢できなくてむせび泣いてしまうと思ったのかもしれない。母がこんなにも長い間、心にしまっておいたことがあるなんて思ってもみなかった。

僕は晩ご飯を食べなかった。お腹もすかなかった。僕はタンスの棚にたたんでしまってある母の服を撫でに行った。家の中は静かでひっそり

していた。ポーン姉さんはベランダに座って頬に手を当てて黙りこくっていた。僕が呼んだのに姉さんは何も答えず振り向きもしなかった。僕は姉さんの側に行った。

「姉さん、どうしたの？」

「何でもないわ」

姉さんはこう答えたけど、僕はポーン姉さんの声が震えているのがわかった。そして、ポーン姉さんと僕は二人して、母が懐かしくて忍び泣いた。

一九九〇年

「自転車に乗っていて、風が吹いてくると涼しくて気持がいいなあ…」

俺はいつも心でこう思っているけど、自転車に乗ることは、便利さや快適さの点でバイクや自動車には敵わないと断言できる。雨降りや強烈な日差しの時には特にそう言える。それはさておき、日差しと張り合って汗を流して自転車をこいだ後に、偶然風が吹いてくると、俺は思わず前言のようにこう独り言ちてしまう。

「自転車に乗っていて、風が吹いてくると涼しくて気持がいいなあ…」

日差しと抗って自転車に乗っている時、自分がどんなに辛くても、道端に立って車を待っている人を見ると、ついその人たちを後ろに乗せてやりたいと思ってしまう。道端で日を浴びて立っている人は、日差しと抗って自転車に乗っている俺より何倍も辛いだろう、と思ってしまうからだ。俺はただそう思うだけで、親しくなきゃ誰にも声をかけたりしな

い。自分だって大変な状態なのに、他人を楽にさせてやろうと申し出たとしても、バイクや自動車に乗るよう誘う方がふさわしいし、自転車よりずっとましだと思うからだ。

ある日のこと、思いがけなく人から自転車に乗せてくれと頼まれた。

「どうしてる！　長いこと見かけなかったなあ。乗せてってくれよ」

その人は親しそうに話しかけながら、手を挙げて俺に停まるよう合図した。俺はどこで会ったのか思い出せなくて戸惑ったけど、その人が親しい友人のように話しかけてきたから、こっちも親友のように応えた。こんな訳で重さは優に五〇キロ以上になり、自転車のタイヤは押し潰されてよろよろした。それでも俺は進ませようと更に力んだ。

「どの辺まで行くんだい」

俺は尋ねた。

「遠くじゃないさ。この先で降りるよ」

「遠くへ行くなら送ってやれないいな。あと二キロで家に着くから」

「ああ、俺はそこまで行かないよ」
　走っている間ずっと、彼は今日歩いて仕事に行くことになった理由を話した。家には自転車が二台あるものの、一台は故障していること。もう一台は、帰省するので通行許可書（訳注―当時、居住地から移動する時は役所の許可が必要だった）に署名をもらいに行くため、奥さんに使わせているということだった。更に、彼は俺の自転車は頑丈でスムーズにこげて後ろに乗っても楽だと褒めた。俺はたいがい聞くだけで、一体彼は誰だろう、何という名前だろうとずっと考えていた。聞いてみようとしたら、喉が何かで塞がったような感じがした。それに、彼に「友人も覚えていないのか」と言われるかもしれないと案じた。それで彼は昔の友だちの一人だと思うことにした。こう思うと気が楽になって、そのままこぎ続けた。
　そんなに行かないうちに彼は言った。
「着いた、着いた。降りるよ」

彼は俺が自転車を停めないうちに降りてしまった。俺は最後の機会になると思って振り返って彼の顔を見た。彼は礼を言い、気安い間柄のように手を挙げた。俺は彼の感謝に応えて頷くと自転車をこぎ進めた。

俺は自分の記憶を疑った。だから、彼は見ず知らずの人だと敢えて思い込まないことにした。例え彼が面識のない人であったとしても俺には何も害はない。その上、知らない人を、歩くより早く、しかも多少なりとも、その人の疲れを軽くして目的地まで送って行って助けてやったと思えば、むしろ嬉しいことだ。

あの友人を助けてやったことは、人としてある喜びになった。とは言え、人というものは誇りや意見を持つ世界の生き物で、他人と関わるために規律や習慣、礼儀作法を持っている。別けても都会では、援助を必要としていても、他人に軽蔑され名誉や体面をなくすことを恐れて黙っている人がいる。助けたいと思っていても、助けを必要としている人が、何か悪巧みをされていると思ったり、侮辱されるのではないかと思った

りするため二の足を踏む人もいる。だから、助けを必要な人と助けてやりたい人は、同じ考えをしていながら、ほとんど触れ合うことがないのだ。

何日か過ぎたある日、俺は五月の燃えるような日差しの中を家に向かっていた。道端に年取った男性が一人立っているのが見えた。その人の視線は、通り過ぎる車一台一台に注がれていた。側まで行った時その人と視線が合った。その人は助けてほしいという顔つきをしていた。俺は決心して自転車を停めて先ず尋ねてみた。

「おじさん、どこへ行くんですか」

「家へ帰るんだ。シーカイなんだ」

「おじさん、自転車の後ろに乗れるかな。送って行きますよ」

「乗れるさ。乗せてってくれるのかい」

こうして俺は見知らぬおじさんを後ろに乗せて行くことになった。おじさんの家は俺の家より更に遠くにあったけど、俺はおじさんを目的地

まで送り届けて帰宅した。俺は嬉しくなってそっと呟いた。
「自転車に乗っていて、風が吹いてくると涼しくて気持いいなあ」
一度、俺はバイクを預かったことがある。それは仕事で地方へ出張することになった友人から預ったホンダの緑色のバイクだった。独身で職員寮に住んでいた彼は、留守の間、気ままにバイクを使ってもいいと言ってくれた。それで俺はほとんど毎日、通勤用の乗り物として利用させてもらった。けど、傷つけないよう故障させないように注意して扱った。そのバイクが手元にあった二週間の間に、俺が慎重さを欠いたせいで、別な言い方をすれば、余計な世話を焼き過ぎたせいで、おかしなことが起きた。
年齢三十過ぎ位のその女性は、多分俺より四、五歳年上だろう。彼女は日を浴びて車を待っていた。俺は彼女が手を挙げて車を止めようとしたのを見た。最初、彼女は俺に手を挙げたのかと思った。ちょうどその時、一台のタクシーが走って来た。けど、客で一杯だったため、そのま

ま通り過ぎて行った。こんな訳で、俺は彼女の近くにバイクを停めることになってしまった。それでこう尋ねた。
「タクシーは満員だったから停まらなかったんですよ。よかったら、俺、送って行きますけど」
「どうして私があなたのバイクに乗らなきゃならないの！」
彼女は強い口調で言った。
「料金なんて要りません。ただ送ってあげるだけですよ」
俺は純粋な気持でこう言った。
「ただでも、お金を出しても乗らないわ」
「日を浴びていたから気の毒に思っただけで、単なる好意ですよ」
「その好意はありがとう。でも、気を引くようなことしないで」
俺は自分が悪さを企んでいるように見られたとわかったから、二度と彼女に顔も見せず振り向きもせず、厄介なことにならないようにその場を離れた。俺は、あの女性が見知らぬ人の車に乗るのを断ったことは正

しいのだから、彼女を非難したくない。彼女は注意深い人だ。品格のある女性はみだりに他人の車に便乗するようなことをしない。俺はバイクに乗っている間ずっと彼女の言葉を心の中で繰り返した。

「気を引くようなことしないで…気を引くようなことしないで…」

俺は自分が悪巧みをしていると見られたことを怒ってはいない。けど、道々ずっとおかしくてたまらなかった。というのは、あんな風に余計な世話を焼いた自分がおかしかったのだ！

でも、俺は誠実なことをしたかったのだから落胆はしなかった。一度目は結果がでなかったけど、もう一度だけ試してみることにした。良い結果がでなければ、これ限りで試すのをやめようと思った。

ある朝、俺はいつものように仕事に出かけた。市街地に入った所で、女性が一人で弁当箱を持って道端に立っているのが見えた。俺はスピードを落としてオイルの流れを抑えた。直にエンジンが止まってバイクはその女性の側に停まった。俺はバイクを降りて時間をかけて不思議そう

にあちこち調べてみた。しばらくしてエンジンをかけてみると一度で直ぐかかった。俺はその女性の方を向いた。彼女はどこかある場所へ行きたくてたまらないのか焦っているようだった。

「迎えに来る人を待ってるんですか」

俺は尋ねた。

「えっ、あのー、私、タクシーを待ってるんです」

彼女はどぎまぎして言った。

「急ぐなら、俺、送って行きますよ」

「急いでるわ。病院にいる母に食べ物を届けに行くところなの」

「じゃあ、乗るといいよ、送って行くから」

彼女は、俺が助けようと手を差し出したことに喜びと感謝の表情を浮かべた。俺は彼女をマホソット病院へ入る道の角まで送って行った。彼女はバイクを降りて、もう一度礼を言った。そして俺たちは各々の方向に別れた。俺はバイクを走らせて間もなく事務所に着いた。始業まで五

分を残すところだった。

二週間が過ぎて友人がバイクを取りに来た。バイクはやつが預けに来た時と同様に調子良く走る状態にあった。やつは、必要な時はいつでも言ってくれれば喜んで貸すと言ってくれた。俺たち二人は高校時代からの親友だった。

俺は、私用にも通勤にも自転車に乗る毎日に戻った。たまに道端で年寄りを見かけると、あまり遠くない所で方向が同じなら後ろへ乗るよう誘った。断る人もいた。多分、自転車の後ろへ乗るのは、何らかの事情で具合が悪いんだろう。けど、俺は相手の方から頼まれでもしない限り、見ず知らずの女性を後ろに乗せることは二度となかった。

エピローグ

土曜日の夕方のことだった。俺は、デング熱（訳注―蚊によって媒介

されるウイルス性の熱帯伝染病。数日の潜伏期を経て、高熱が出た後に顔や手に発疹が現れる）で入院していた甥の見舞いに行った。

この時期、ヴィエンチャン市内はデング熱が流行り始めて三ヵ月目になっていた。過去に流行った時と同じく最悪の状況になっていた。一九八七年五月から流行り始め、国内の多くの地域に広がっていた。医者は予防と治療について様々な方法を指導していた。方法の一つは、子どもにココナツ、レモン、オレンジなどをジュースにして、たくさんの果物を摂らせるというものだった。

小児の治療棟の横に大勢の人が群がっていた。子ども、甥や姪の付き添いで来た人や、病人に必要なものを持って来た人たちだ。薬草のこと、薬局のこと、行き来に使う車のことなどを尋ね合う話し声がした。

一人が心配そうな声でこう愚痴をこぼした。

「うちの子、もっと早く病院へ来ていたら、こんなにひどくならなかったかも。車がなくて困ったわ。夕方、熱が出始めたのに次の日になって

やっと病院へ来られたのよ」
　ある人が嬉しそうに言った。
「うちの子は、いつになく微熱が出ただけだったけど急いで連れて来たの。近所に自動車を持っている人がいてよかったわ。その人、前々から子どもが病気になったら、直ぐ呼びに来るよう言ってくれてね、だから夕べのうちに連れて来られたのよ。うちの地区じゃ、皆その人のところへ駆けつけてるの。いつも病院へ送ってくれて助かってるわ」
「私はね、姪っ子に血をあげに来たんだけど、あいにく血液型が同じじゃなかったから隣のベッドの子にあげたの。血が必要な人ばかりだわ。あーあ、みんなにあげたいから、もっとたくさん血がほしいわ」
　仲間の問いに答えるもう一人の声が聞えてきた。その女性はこう話した。
「私も車のことでは困っているわ、タクシーばかりも使えないし。子どもが二人一緒に病気になってるのよ。

一昨日、長女がご飯を届けに来ようとして、長いことタクシーを待っていたんですって。その時ちょうどバイクが停まって、乗っていた人が送ってくれたから来られたのよ。親切な人がいてよかったわ」

俺はそのバイクに乗っていた人が自分だとは信じたくない。あれはもう何ヵ月も前のことだったから。もしかして、その女性は仲間と話したくて、だいぶ前のことを、つい昨日のことのように話したのかもしれない。いや、俺はそんな風に思わないことにしよう。どうであれ、誰かが彼女の娘さんを送ってやったに違いない。

こう思うと俺は余計嬉しくなった。他人のために尽くす心がけを持った人がいる、という話を聞くと気が晴れ晴れする。

だから、自転車に乗っていて、風が吹かなくても気分は爽快だ。

一九八八年

ジャール平原からの声

この封筒はジャール平原から私宛に送られてきた。封を切ると便箋を埋め尽した丁寧な筆跡が目に入った。けれど、それは私宛ではなかった。封筒の中には以下の内容の、もう一枚の小さな紙があった。

お願いです。受け取り手になる僕の親しい友人が、いつか読むことができるように、この手紙をあなたの新聞に載せてください。僕は彼の住所を知りません。彼がアメリカへ帰ってから間もなく僕がジャール平原に帰って来たからです。

ジョニーは、アイ・ヴィー・エス（International-Volunteer-Service国際ボランティア団体）のアメリカ人ボランティアでした。ラオスの人々と慣れ親しむようになってから、ジョニーはインドシナでのアメリカの反戦運動家になりました。彼は、アメリカがラオスへ入って来たこ

とについて論文を書きました。結論は、アメリカはラオスから完全に撤退しなければならないというものでした。彼は、今後アメリカの対外政策を評価するために検討してもらうよう、この論文をアメリカ政府と連邦議会に送りました。

あなたの所で発行する新聞は、どの号もフランス語と英語に訳されているのですから、この手紙が印刷されてアメリカ合衆国まで送られることを僕は信じています。

マイデーンより

この小さな紙の文面は、私に「難民」になった一人の青年を想起させた。我々が出会ったのは、戦争終結後に故郷へ帰還する「難民」の送別会の時だった。私は記者として、ポーンサワン（訳注―シェンクワン県の県都）まで空路で送還される第一回目の「難民」に同行した。そして、この機会に生まれ故郷へ帰ることになった感想をマイデーンに取材したのだった。

マイデーンは言った。
「僕は両親と弟や妹たちと一緒に、一九七〇年にジャール平原から強制的に退去させられました。そしてヴィエンチャンから二五キロほど離れたイライ村の難民収容所に連れて行かれ、ほぼ五年間過ごしました。
今回、生まれ故郷に帰ることになって、何にもたとえようがないほど嬉しくて、涙がこぼれるほど興奮しています。新しい人生が始まるのだ、と思っています」
手紙の内容は次のように書かれていた。

親愛なるジョニー
僕は、懐かしい友人の君に宛てて便りを送ってもらおうと、かつて血の戦場だったジャール平原からこの手紙を書いています。君がアメリカへ帰って間もなく、僕は最初の難民の人たちと一緒に元いた村へ帰って来ました。

幾年も経ってから離れていた故郷へ戻って来たことは悲しさが混じった興奮する出来事でした。目の前にジャール平原が現れた時、涙が溢れ出てきました。平原はどの方向を見てもバラバラになった死骸と爆弾の穴ばかりで、荒れ果ててひっそりとしていました。山並みに沿うように一本だけ先端が裂けて真っ黒くなった立ち木が、静まり返った中で、たった一つの目印になっていました。

ツバメが風の中で宙返りして行き来している他は、どんな生き物も見当たりません。見渡す限り広がる草原の緑が風になびいて海のように波立っていました。この鮮やかな緑は、至るところに汚れた跡がなければ最高にきれいなことだろう。

この汚れた点はジャール平原を標的にした、特にB五二機による弾痕のようで、一九七〇年以来、数え切れないほど投下されたものです。生きていられなかったのは人間だけでなく、動物も死に絶えてしまい、天と地が残っているだけでした。この辺りに住んでいた人々はある地点か

ら別の地点へ次から次へと追われて一掃されました。人々には自分たちの運命を決める時機がなく、惨めさと苦難しかありませんでした。
僕は立ち尽くしたまま、悲しくて失望してジャール平原を眺めました。目に映るあらゆるものが、焼け縮んで哀れを誘いました。こんな景色は、優しさのない残酷で非情な人だけしか見るに耐えられるものではないだろう。
いとしい友、ジョニー
戦争が終わったことは本当だけど、戦争の残酷さは、まだ辺り一面に散らばっています。破裂していない爆弾が、まだジャール平原に埋まっているのです。色々な種類が混ざり合っている中で、一番多いのはボムビー（訳注―テニスボール大の殺傷用爆弾）です。僕たちがジャール平原に着いて、たった二日の間にボムビーが三人もの命を奪いました。どの方向に移動するにも注意が要ります。死はどこにでも僕たちを待ち受けていて、触れた者は死ななければ障害を負います。爆弾は草の中に隠

24/VII

なく分け入って、恐ろしいほどに木霊してドーンと破裂します。そして次には痛みや死が続くのです。

危険に囲まれた中にいる両親と僕たち弟妹は、ジャール平原に目印の杭を打って、どの方向へ進むにも細心の注意を払いました。僕たちは皆で仮住まいにする小屋を建て、自給自足しようと土地を開墾して畑を作って柵を立てました。時々、友好国からの援助物資をもらいました。

仕事の合間に、僕たちは見渡す限り広がる平原に散らばっている石壺を見に行きました。石壺は歴史上、昔の人が作ったもので世界の不思議なものの一つになっています。そのかなりの数が、投下された爆弾に当たって壊れていました。各々の爆弾穴は、幅が約一〇～二〇メートル、深さが約五～六メートルで、大部分の穴に水が一杯溜まっていました。

最初そこへ着いた時、僕は、穴は深くないだろうと高をくくって、水を浴びようと飛び込みました。でも、すんでの所でその爆弾穴で命を落とすところでした。僕が溺れそうになっていると、偶然にもそこへ来合

わせた人が助けてくれたので命拾いをしました。でも直に僕の未来はまたも死にかけ、人生で最も酷いことに出会うことになりました。自分自身、半分死んでしまったのだと思いました。それは苦痛以外の何ものでもありませんでした。

ジョニー、僕と家族は、自分たちが食べる野菜を作るために草地を開墾する必要があると前記しました。ある日、僕たちは鍬を担いで、芋を植える穴を掘りに出かけました。一時間余り掘ったところで爆弾に当たってしまったのです。それは地下に残ったボムビーでした。

僕は気を失ってしまい、気がついた時は病院にいて、手足を包帯で巻かれて身動きできない自分を見る羽目になりました。後になって足二本を切断されたことを知りました。左腕は傷を負って痛みましたが、重傷ではありませんでした。弟の一人は左足にケガをしましたが軽かったので家に帰ることができました。自分が体の一部を失ったことを知って未来は真っ暗闇でした。だから病院にいる間ずっと、正体なく泣いて、し

やくり上げ、とめどもなく涙を流し続けました。
ジョニー、僕は障害者になりました。明るい未来をなくし動ける屍になってしまいました。死んでしまったも同然の人間だと言えます。いつでも我に返ると震えおののき、むせび泣いているのです。

　君は将来、僕の手が届かないほど遠くへ進んで行き、平和のための闘士となり、影響力をもつ反戦の志士になり、平和運動の英雄になると、僕は信じています。虐待されている人々、手中から自由を奪い取られた人々、そして、戦争の被害を蒙った人々のために、偉大な事業を続けて下さい。

　僕はジャール平原からの声として、今も尚、同胞の命を脅かしている戦争の残骸で危険に遭った人が発する多くの声の一つとして、この手紙を書きました。

親愛の情を込めて

マイデーンより

私は恐縮してこの手紙を読んだ。心の奥底で身震いするような寒気を感じ、彼に大きな手を差し伸べてやれない恥ずかしさを感じた。

こういう経緯から、この手紙を「編集者への手紙」というコラムに載せることにして「ジャール平原からの声」という見出しをつけた。

一九七八年

ラムヴォン（訳注―対の男女が輪になって踊る伝統舞踊）は十二回が終わったのにペーンカムはまだ一度も踊っていなかった。皆は十三回目を楽しそうに踊っているところだった。

彼女は賑やかな音を奏でているバンドの近くのベンチに座っているたった一人取り残された娘だった。つまり、他の娘たちの所へ来たように花輪を持って踊りを申し込みに来る人はいなかったということだ。彼女は演奏を聞き、裾広のズボンをはいた長い髪の歌手が騒々しく歌っているのを聞いていた。

ペーンカムは興味があって感動して聞いていたのではなく、聞かざるを得なかったのだ。聞こうとしなくても歌は自ずと聞えてきた。彼女は仲間のように出て踊らなかったから退屈しのぎに聞いていた。ずっと座ったままで何もすることがなかったから暇つぶしに聞いていたのだ。

彼女は少しも動かず、ほとんど瞬きもしないでバンドのメンバーが演奏するのを見入っていた。まれに気落ちしたように恨めし気に踊っている仲間の方を見た。

向こうにはラダーポーンが仲間の先頭を切って踊っていた。彼女は美人で、この回の花輪（訳注—花の首飾り）を獲得したヒロインだから、いくらか得意そうに微笑んでいた。と言うのは、彼女は既に三回も花輪を獲得していたからだ。各回のスポンサーは、ヒロインを指名し、その女性をステージの中央に立たせて、彼女から花輪の束を受け取ることになっていた（訳注—スポンサーは、その花輪を他の男性たちに配り、男性たちは、その花輪を目当ての相手にあげて踊りを申し込むのが伝統的なやり方）。

ラダーポーンに続いてソーンナパーがいた。花輪のヒロインにさせようと皆が注目しているもう一人のきれいな娘だ。彼女は休む間もなく毎回踊っていた。年配や若い男性たちが視線を集中しているのは、美しい

孔雀さながら体をしならせて踊る、もう一人のモデル、ファーヴィチットだった。次はオーンアノンで、鼻筋の通った三日月眉の娘だ。彼女は六回も花輪を受け取っていたからラムヴォン娘の見世棚（訳注ー踊りの相手をする娘たちが指名を待って並んでいる場所）常連のスターに相応しいと言えた。

その他の娘たちは、一回か二回しか花輪のヒロインになっていなかった。ペーンカムときたら、ただの一回も花輪をもらっていない。彼女の所には、会釈して踊りに誘いに来てくれる人は、まだ一度も現れていない。だから彼女は娘仲間のお喋りで陰口を言われ、からかわれ、ピエロ役になっていた。

ラダーポーンは、ペーンカムを振り向きながらソーンナパーの顔を見てニヤリとした。こう言っているようだった。

「ペーンカム、この回もまた皆と踊らなかったわね」

オーンアノンは仲間とクスクス笑って言った。

「ペーンカム、いつものように座って蚊を叩いているわ。ここへ来た男性たち冷たいわね。一度も指名して踊りに誘わないんだもの。彼女、痺れをきらしているでしょうよ」

実際、ペーンカムは仲間のようにきれいではなかったし、流行遅れの格好をしていて、社交ダンスも踊れなかった。控え目で快活さもなく地域では目立たない存在だった。

彼女は貧しい家庭の娘で、母親を手伝ってカノムコ・コック（訳注―米の粉、ココナツ、砂糖などを混ぜて半球型に焼いた菓子）を作って売り、六人もいる弟や妹の世話をしなければならなかった。彼女の父親は大工だった。家族の暮ら向きは、良くなることはなく事欠くばかりで、他人のようにきれいな服を買う余裕はなかった。

他の娘たち、わけても今まで登場した娘たちは皆、上級役人や金持ちの娘たちだった。彼女たちの金遣いは底なしで、まるで一度か二度着ると捨ててしまうかのように、ほぼ毎月ブラウスと裾広ズボンを仕立てて

いた。一方、ペーンカムは一年か二年でようやく一着仕立てることができた。だから着古したものばかり身につけることになった。ラムヴォンの見世棚で他の娘と比べると一目でそれと知れた。そんな風だから男性たちは、関心を示すこともなく踊りを申し込もうともしなかったのだ。彼女はたった一人放っておかれて気の毒な人になっていた。
「でもいいの、商品を宣伝しているみたいに、人に見せるために指名されてステージの真ん中へ出て行かなくても」
彼女はこう思った。
その通りで、ああしてラムヴォンの見世棚に並んだきれいな娘たちは、まるで商品のようだった。司会者もはばかることなくこう言った。
「今回の花輪のヒロインは、名の知れたきれいなお嬢さん、ソーンナパーさんです。ほら、向こうから満面に笑みをたたえてステージに上がってきます。さすがにきれいですね！　どこもかしこも美しい。すらりとした足、格好いいヒップ、そしてふくよかなバスト、弧を描いた眉、き

れいな首筋といい、まったく花輪のヒロインにふさわしい娘さんです。歩き方も堂に入っています。ひとつ、彼女に彼氏がいるかどうか聞いてみましょうか。おや、彼女、恥ずかしそうに微笑んでいます。こういう仕草は、心はまだ空いていますということに違いありません。

妻も子もいらっしゃる若年中年の男性を始め、ご年配の殿方まで、話上手な方は直接当たってみて下さい。ソーンナパーさんはとても親切で魅力的です。親しくなって、皆さんの可愛い彼女になるのを厭わないことでしょう。

この特別な回のスポンサー……大将閣下、どうぞ上がって娘さんから花輪を受け取ってください。大将閣下は揺るぎない信仰心をお持ちで、今回五万キープを寺院へ寄付されたので、この特別な回のスポンサーになっていただきました。もしソーンナパーさんが閣下に一分間微笑みかけるか、酌をしに行けば、その額が十万になることは確実です。

さあ、大将閣下が上がって来られました。どうぞ、敬意を表して拍手

をお願いします。この回の曲はサルッピー（訳注ー一九六〇年代後半に流行ったダンス）です」

きれいな娘たち以外の、見世棚に並んだ娘たちにさえ立派で響きも良い名前があった。彼女たちの名前は、遥か遠い所に住んでいる人でもあるかのように、普通のラオス人の名前とは違って長くて珍しい名前だった。一方、ペーンカムの名前は、ごくありふれていて長くもなく覚え易かった。

夜が更けるにつれて、村の寺の祭りは益々賑やかになって、ラムヴォンは二十回目を数えていた。時間は夜中の三時になっていた。

ペーンカムはまだ一度も踊っていなかった。彼女は仲間といても楽しいと思わなかったし孤独で寂しかった。家へ帰って寝たかったけれど、祭りの世話役に村内の祭りだから我慢するよう言われていた。だから彼女は強いられて退屈でも居続けることになった。彼女は、自分に寺の門で花を売らせる役の代わりに、ラムヴォンを踊る役をあてがった祭りの

世話役を恨んだ。花を売る方がより似合っているし、売ることは得意だったからだ。ラムヴォンの見世棚に座らされたことは、彼女の意思に反し、明らかに面目を潰すような、人の使い方を誤った扱いだった。

司会は二十一回目のラムヴォンを告げた。オーンアノンがまたこの回の花輪のヒロインになった。この回のスポンサーは花輪を幾つも受け取ると仲間に配りに行った。司会は、娘さんを指名して上がってラムヴォンを踊って下さいと言った。

男性の客たちは、ぞろぞろとラムヴォンの見世棚に上がって、予め目をつけていた娘さんの所へ真直ぐ歩いて行った。ラダーポーンの所へ直行した人がいた。ファーヴィチットを指差した人がいた。続いてソーンナパーに向かった人がいた。その次の人は、その隣に座った娘を指した。そして、次々に続いて行った。けれど、ペーンカムの所へ行く人は誰もいなかった。彼女はラムヴォンの初回からこういう状態に慣れていたから、時間が無駄に過ぎるのを感じながらも顔つきは平然としていた。彼

女は落胆さえしなかった。そして、深刻な考えごとをしている人のようにじっと座っていた。

その直後、一人の青年が前に立ち止まって花輪を差し出したので、彼女はびっくりして自分の目を疑った。

「僕とラムヴォンを踊ってください」

その男性は言った。

彼女は承諾しながら怪訝そうに彼の顔を見た。他の娘たちはそれを見ててんでに驚いて、ペーンカムに向かって唇を尖らせながら、フフッと笑って言い合った。彼女の耳に娘たちの話の断片が聞こえてきた。

「雨が降るかもよ、ペーンカムがラムヴォンを踊るんだもん」

「あの男の人、どこから忍び込んで来たのかしら、あの格好を見ると、ちょうどお似合いだわね。フッフッ…」

ペーンカムは、その晩初めて、たった一度だけラムヴォンを踊った。ラムヴォンが終わった時、踊り相手の男性は、彼女に別れを告げて見世

棚を降りて行った。彼女はラムヴォンの見世棚を取り巻く人込みの中に消えて行った彼の後ろ姿を見た。彼女は彼の顔つきや態度を覚えていた。彼はかなり痩身で礼儀正しかった。髪は短く、ラムヴォンを踊りに来るどこでも見かける男性のように長くしていなかった。多くの不良青年のように肩で風を切るような様子もなかった。彼は多分二十四、五歳ぐらいだろう。

その晩のラムヴォンは二十六回で終わりとなった。時刻は四時半だった。

その一週間後、ペーンカムが家の前でカノム・コックを売っていると、一緒にラムヴォンを踊った馴染みのない顔の青年が訪ねて来た。彼は彼女と和やかに話をして菓子を六対十二個買った。彼は名前も告げず、職場や住所も彼女に知らせなかった。彼女も敢えて尋ねなかった。彼はただラムヴォンを一緒に踊って、彼女の所へいつも買いに来てくれる人たちのように、菓子を買いに来てくれただけの人だと思ったからだ。彼は

百姓や肉体労働者のような貧しい人に同情すると言った。彼は自分も労働者の一人で、誰をも騙したり欺いたりしない潔白な職業だから誇りに思っているとも言った。

二年余りの時が過ぎた。一九七七年初めになって、あの見慣れない顔の男性が再び彼女を訪れた。彼はラオス人民軍の制服を着ていた。彼女の方は地方で動員された公務員になっていた。

「解放軍の兵士なのね。以前から知らなくて残念だったわ」

彼女は言った。

「僕は君をよくわかっているよ。あの時は右派が権力を握っていたから、君を危険な目に会わせないよう、足繁く来るのを避けていたんだ」

「あの解放運動が起こった時、わたし、この地区の女性同盟の支部長だった…」

「そう言えば、あの年、休む暇もないほどラムヴォンを上手に踊っていたきれいな人たちは皆どこへ行ったんだい？」

「あの人たちだったら、逃げた人もいるし、荒んだ人もいるわ。行政が更生させようと何人かをあの女島（訳注ーヴィエンチャン県ナムグムダム貯水湖に浮かぶ島で、解放後一時期、男島と女島に分け、男女の風紀更生の場になった）に送ったの。あの人たちの更生は難しくないわ。以前、品行が悪かったのは、そういう風に仕向けた社会や環境のせいだもの」

「彼女たち、更生に行けて良かったね。保護されて更生すれば、社会の役に立つようになるんだから」

彼女と彼は打ち解けて話をした。彼の目に、彼女は尊敬に価する美しい人に映った。

一九七八年

あとがき

私がウティン・ブンニャウォン氏の名前を知ったのは、ラオスの短編小説を収集、翻訳し始めた一九九〇年頃のことです。

その後、度々ラオスへ出向く機会があり、氏始め何人かの作家と知り合い、作品を通して親しく付き合うようになり、九五年には作品の翻訳許可をいただくことができました。

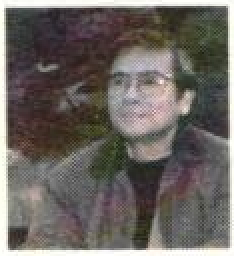
穏やかな人柄だった氏を偲びつつ、こつこつと翻訳を進めて今日に至りました。一つ一つの作品から氏の人情味、豊かな感性が滲み出ていることを感じていただければ幸いです。

尚、翻訳に際し、委細なラオス語は東京外国語大学東南アジア課程ラオス語専攻の鈴木玲子准教授にご指導いただきました。

二〇〇八年十一月　静岡にて

前田初江

著者略歴



ウティン・ブンニャウォン

一九四二年サイニャブリー県に生まれる。一〇歳の時、進級のため親戚を頼ってヴィエンチャンに移り住む。二八歳の時、レーンプーパーグンというペンネームで小説を書き始める。

文芸誌「パイナーム」（一九七二年創刊）、「ワンナシン」（一九七八年創刊）の当初から常連の執筆者として短編小説の他、論説、随筆など多くの作品を発表する。また、ラオス作家協会の設立にも貢献し、協会発行の新聞「シアンケーンラーオ」（一九九四年創刊）の編集に携わる。

短編小説集「母さんのいとし子」（一九九一年刊）は七〇年代から九一年の間に発表した短編十二編をまとめたもの。平易な文章で家族愛や友情、

自然描写を表現していると定評がある。

情報文化省の文芸局勤務時代に一九八一年より四年間ロシアへ赴任。退官し、アメリカに滞在の後、東京外国語大学ラオス語専攻の助教授として教鞭をとる。氏の作品は、ロシア語、ベトナム語、タイ語、英語に翻訳出版されている。二〇〇〇年没。

装丁：ドアンケー・ブンニャウオン
Book Design : Douangkhe Bounyavong

「母さんのいとし子」

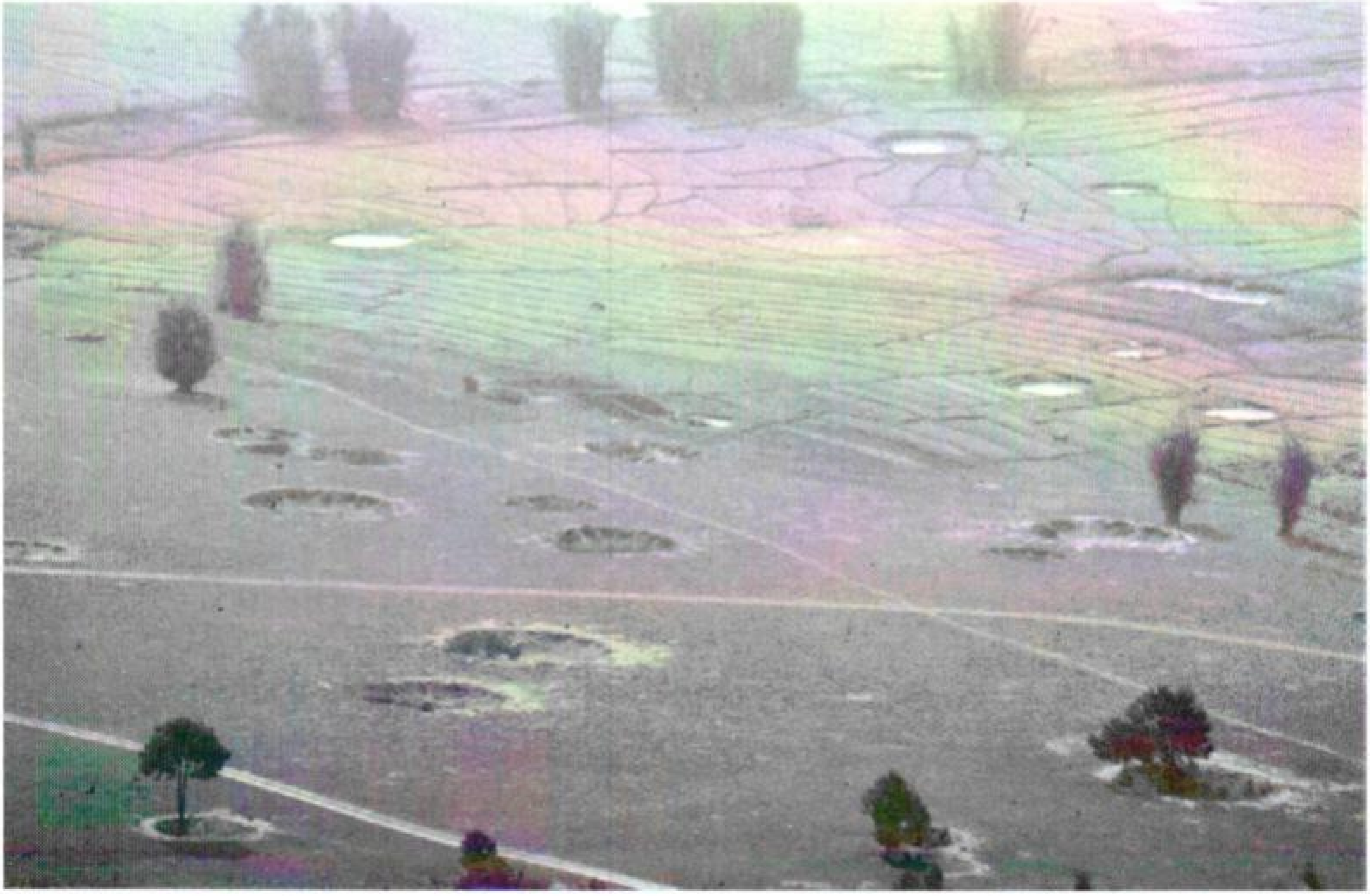
2008年（平成20年）12月22日発行
著者　ウティン・ブンニャウォン
訳者　前田初江
発行者　ドアンドウアン・ブンニャウオン
発行所　ドークケート社
ヴィエンチャン、ラオス人民民主共和国

「Mother's beloved」

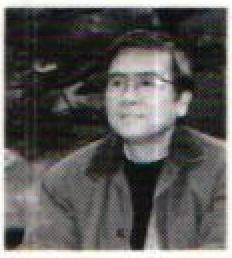
Published on Dec. 22. 2008
Author : Outhine Bounyavong
Translator : Hatsue Maeda
Publisher : Dokked Publishing Co.,Ltd
e-mail: dokked@veetoo.net
Vientiane, Lao P.D.R.
Ph/fax: +(856-21) 263748

24/VII
ຫ້າມຈຳໜ່າຍ

© 2008 Dokked publishing Co.,Ltd
Printed at Praxay Graphic, Vientiane, Lao P.D.R. 2008
ທະບຽນພິມ : 221 / ພຈ 10122008



爆弾投下によってできた穴
シェンクワン県



著者略歴

ウティン　ブンニャウオン

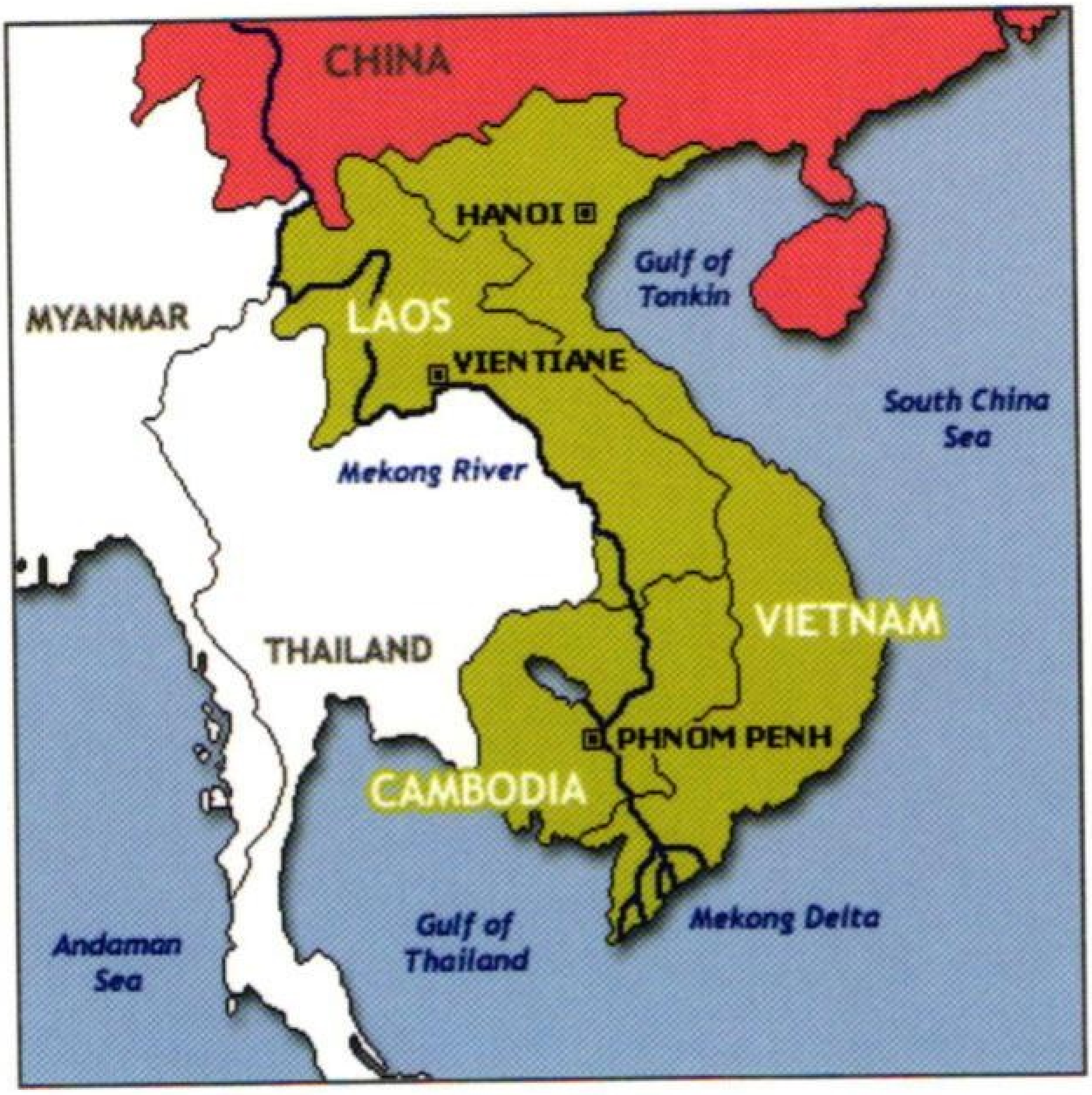
1942年、サイニャブリー県に生まれる。10歳の時、進級のため親戚を頼りヴィエンチャンに移り住む。

28歳の時、レーンプーパーグンというペンネームで小説を書き始める。文芸誌「パイナーム」(1972年創刊)、「ワンナシン」(1978年創刊)の当初から常連の執筆者として、短篇小説の他、随筆など多くの作品を発表する。

また、ラオス作家協会の設立にも貢献し、協会発行の新聞「シアンケーンラーオ」の編集に携わる。

短篇小説集「母さんのいとし子」(1991年刊)は1970年代から1991年の間に発表した作品12編をまとめたもの。平易な文章で家族愛や友情、自然描写を表現していると定評がある。2000年没。

ເມືອງລາວທີ່ຮັກແພງ



ດອກເກດ
DokkeD
Publising Co.,Ltd
e-mail: dokked@veetoo.net
Vientiane, Lao P.D.R.
Ph/fax: +(856-21) 263748

Price:
¥ 750 E+tax
40,000 Lao Kip